

関東学院

学院史資料室 ニュース・レター

No.26
2023.3



秋のなかよし会(2022年10月):小学校



大型遊具完成(2018年11月):小学校



金沢文庫(釜利谷)キャンパス全景:大学

目

次

はじめに	2
特集1 関東学院小学校創立70周年	
三春台の風 関東学院小学校2012-2022	3
特集2 関東学院創立150周年に向けて	
「変わりゆくキャンパス(金沢文庫キャンパス)」	
釜利谷(金沢文庫)キャンパス、お疲れさま!	23
金沢文庫(釜利谷)キャンパス随想 桜並木、オリーブ、ネジバナ	27
写真で振り返るキャンパス その1:金沢文庫(釜利谷)キャンパス	31
その2:KGU関内メディアセンター	32
「学院史資料室事務室ミニ資料展」の開催について	33
中学関東学院における「福音的キリスト教」の一断面	
一内村鑑三・高倉徳太郎 等をめぐって(二)	34
寄贈資料の紹介、坂田創先生・編集後記	36

は じ め に

関東学院 学院長 松田 和憲

皆様の許に『関東学院学院史資料室 ニュース・レター』No.26をお届けできますこと、嬉しく思います。

前号では、「関東学院創立150周年」を視野に入れ、将来の学院の在り方・未来像・展望を検討する方向にシフトする意味で、花島光男先生、三浦啓治さんが経験を踏まえて「学院の存在意味」について書いてくださいました。また、2022年度4月からスタートした「キリスト教人間学インスティテュート」についてのアピール文を掲載しました。

振り返ってみると、過去2～3年の間に、学院の各校、各園の周年行事が相次いで行われ、『関東学院学院史資料室 ニュース・レター』本来の役割を考慮して、No.23、No.24とそれぞれ責任ある方々に、自由な筆致で貴重な歴史的記述をして頂きました。その点で言えば、もう一つの学校について歴史を振り返る必要性がありました。関東学院小学校が2022年10月に創立70周年を迎え、創立記念の感謝礼拝をはじめ、意義深い記念行事を行ったからです。そこで、本号において、小学校の岡崎一実校長先生にお願いして「三春台の風 関東学院小学校2012-2022」と題して10年間の小学校の歩みについて子細に記して頂きました。先生が小学校長に着任されて以来、「夢を育む学校」とのチャッチフレーズのもと、三つの教育目標を掲げて鋭意努力したこと、ICT教育に力を注いで競争力を高めることで教育効果を上げたこと、図書館教育を充実させ読書意欲を高めて、「ほんの学校」としての認知度を得ることに注力したこと、また、キリスト教教育を推進するために様々な創意工夫をされたこと、祈り求めていたパイオルガンがついに与えられたこと、さらには、過

去3年間はコロナ禍の中で、ぶれずに小学校としての教育活動を続けて来れたこと等々が生き生きと記されており、小学校の貴重な記録となりました。多忙の中、時間を割いてお書きくださった岡崎先生に感謝の意を表したいと思います。

本号におけるもう一つのテーマは、2023年度から金沢文庫キャンパスの2学部の修学地が金沢八景キャンパスに変更することになったことに併せ、長きに亘り金沢文庫キャンパスで教鞭をとってこられた二人の先生、御園和夫先生、大越公平先生に、その想いや抱かれた感慨について自由に書いて頂きました。

特に御園先生におかれましては、2022年暮れの早朝、交通事故で急逝されたとのニュースが入り、大変心を痛めております。そのような事があり、御園先生の文章は遺稿となってしまいました。広く日本の英語教育の先駆けとして、また学院のためにご尽力くださった先生のお働きに深く感謝すると共に、主よりの慰めを心からお祈り申し上げます。

もう一点、付記すれば、2022年は、時おりしも関東学院大学神学部が廃部となってから50年目を迎えたということです。本神学部廃部の出来事は日本のキリスト教界における大きな損失とされていますが、その経緯についての歴史的検証は手付かずのまま残っています。いずれそう遠くない将来、この問題を取り上げる必要があると思っています。

多くの方々の協力を得て、No.26をお届けできますこと、感謝致します。

皆様の上に、主よりの変わらぬ平安を祈りつつ



金沢文庫キャンパス 小講堂

三春台の風

関東学院小学校2012-2022

関東学院小学校 校長 岡崎 一実



小学校全景(2014年9月)

【はじめに】

1952年に三春台分教室としてスタートした関東学院小学校。先達の祈りと献身によって幾多の困難を乗り越え、2022年に創立70周年をむかえた。創立60周年の年から現在まで校長をつとめている岡崎の視点からこの10年間の「いま・書ける」学校のあゆみを記録することで、創立70周年を特集する本号の責を果たしたい。

【2012年度】

2012年4月3日、小学校長就任式。関東学院中高の出身(31回)ではあるが小学校と直接のつながりはない、いわゆる“落下傘”での人事だった。

最初のしごとが、2010年度から2011年度にかけて策定された「関東学院グランドデザイン」にもとづく「中期目標と計画」(「Olive7」)を2週間のうちにまとめて提出すること。このあとずっと悩まされる計画・報告にかかわる文書洪水の最初の洗礼だった(文書の作成を申しつけられるたびに「このいそがしい時期に小学校の事情も知らず」と文句は言っているが、これまでしめきりにおくれたことはいちどもない)。

このときに「夢を育む学校」というコンセプトを「Olive7」にもりこんだ。校訓「人になれ 奉仕せよ」のもとにある学校であることはそのとおりだが、小学校のかたちを内外にしめすキャッチーなキーワードがなかったので、広報的な観点も考慮して「夢」を核にした学校づくり＝「夢を育む学校」を展開することにしたのだった。「～になりたい」「～をしてみたい」という目標

にくわえて、「～のために」という目的をあわせたものを「夢」ととらえる。「人を笑顔にする〇〇になりたい」「〇〇になって人を幸せにしたい」「人のために働きたい」。目的と目標をあわせもった「夢」を在学中に育んでほしい。そこに独自性をもたせた「夢を育む学校」である。「夢を育む学校」とあらたにさだめた3つの教育目標は、この後の学校づくりと広報活動の核となっていく(「夢」は、のちに2019年度から「夢たまご」としてつぎの展開にうつることになる)。

3つの教育目標

- 1「“人になれ 奉仕せよ”を体現する子」を育てる。
- 2「“夢を実現する学力”を身につけた子」を育てる。
- 3「自分で考え、判断し、行動しようとする子」を育てる。

就任早々のしごとは「Olive7」だけではなかった。建て替え予定の新校舎設計の検討、入学者の定員割れに志願者数・在籍児童数の漸減傾向と多数の転出者対策、未納学費の督促、毎週まわってくる礼拝担当……。頭がいっぱいになっているところ、5月21日の早朝から校庭にあつまって、子どもたち、保護者、教職員、みんなで金環蝕を観察したのはもうはるかかなたの思い出になっている。

私立小学校三重苦(少子化・リーマンショック・地震による通学不安)にあって、児童募集の広報活動に法人の広報課がふんだんな予算をかけていた時期だった。スタジオでの対談ビデオ収録、大型ポスターの撮影と鉄道駅への掲出、ザンビアへの靴寄贈とそごうでの贈呈式、ほかにはない斬新な学校案内パンフレット作成、公式サイト設置など、そのスケールに面くらい、地に足のついた感じがしないま言われるとおり動いていた。法人広報課による募集広報のサポートは、その後、方針変更と予算削減により縮小されていき、各校での努力にまかされることになる。

「横浜F・マリノス×関東学院DAY」がスタートしたのもこの年で、選手と手をつないで入場するエスコートキッズとともに校長も日産スタジアムのピッチに立ち、名古屋グランパスのキャプテン鬨莉王に花束を渡したのだった。近くにストイコビッチ監督がいて、舞いあがったのをよくおぼえている。このプログラムは「オールKANTO」の強みとして小学校PRの目玉と

なってきたが、コロナ対策もあって2020年度から3年間中断されており、再開が待たれるところである。

校舎建築には“神風”がふいた。このときの小学校には教室棟(1997年竣工)、管理棟(1965年竣工)、体育館・礼拝堂(1980年竣工)の3つの建物があった。このうち教室棟につながる管理棟の建て替え計画が2011年3月11日(奇しくも東日本大震災が発生した日だった!)に法人で認められ、設計がすすんでいた。ネックになっていたのは建築基準法。新管理棟は教室棟の増築あつかいになるため「2分の1ルール」が適用され、設計にかなりの制約があった。しかし、実施設計がすすんでいた9月に建築基準法が改正されてこの制約がなくなり、1棟として新築することが可能になった。設計変更により工期が半年ばかりくりさがることにはなったが、これから数十年使用することを考えればいたしかたない。関係各方面の了承をとりつけ、基本設計からやりなおすことにした。既存の管理棟については予定どおり夏休み中に取り壊し、2学期からは狭くなった校庭をやりくりして使うことになった。

この年は創立60周年にあたっていた。就任1年目で日々校務に忙殺され、創立記念行事には手も気もまったくまわらなかった。5年前にりっぱな創立55周年記念誌はつくられていたが、その前は40年誌で、かならずしも5年ごとになにかしなくてはいけないわけではないらしい。そこで、学校としては解体前に撮影した旧管理棟をあしらった3枚組ポストカードを、オリブの会(保護者会)でも解体した管理棟の鉄骨を鋳造した文鎮をそれぞれづくり、記念品とした。ポストカードについては、1年おいた2014年、創立62周年の年に新校舎竣工記念にふたたび作成、以後デザインをかえながら毎年作成し、周年記念の足跡となっている。

肝心の学校について。異動してあたらしい学校に身をおいたときに感じる違和感＝カルチャーギャップはいくつもあった。ただ、それらを経過も事情もふまえず一方的に変えるわけにはいかない。1学期がすぎたところで「やってみよう・やめてみよう」という文書にまとめ、夏休みになってすぐの「子供の座」(創立当初から使われている教員会議の名称)に提起した。「近いスパンで、すぐにでも」「長いスパンで、数年かけて」に分類して列挙した項目のうち、朝の体操後の行進や教室移動の行列など時間をおかずになくなったものから数年かけて実現したものまで、ふりかえれば新校長による学校改革の原点となる文書だった。

[2013年度]

4月4日、年度さいしょの「子供の座」で「2013年度学校運営方針」を示した。その冒頭。

〈「Olive7」に示した「夢を育む学校」づくりにむけ、「事業計画」にもとづき、下記の項目について各人の持ち味を生かしつつ学校全体でとりくむ。

(各項目の具体的内容については別途提案する)

1. 新たな校務分掌による組織的運営をめざし、骨太な教育計画を立案する。
2. 校内研修は「授業の研修」を眼目とし、日常実践の充実を図りつつ進める。
3. 自己の目標を立てて不断の研鑽に努め、教師としての力量向上にとりくむ。
4. 「五カ年計画」三項目については最優先でその実現にとりくむ。〉

いささか肩肘はった文書ではある。以降、毎年度さいしょの会議で運営の指針、行動規範、重点事項、事業計画などをA4判4ページにまとめ、提起している。

飯田嘉宏理事長(肩書は当時、以後おなじ)の肝煎りで、各校支援のための法人の事業として、前年度7月に「学院改革推進5カ年計画支援事業」が提案された。あらたな事業に取り組みたくてもかぎられた経常費の中では大きな予算をさくことができない。そこに降ってわいたかのような助け船。小学校からは「教育の高度化とICT環境等の整備推進事業」(2,200万円)・「『ほんの学校』プロジェクト」(810万円)・「吹奏楽による音楽教育の充実」(650万円)の3事業を応募し、採択された。これまで力を入れてきた小学校の特色を強化するために、これから必須となるICT機器を活用した教育を先取りするために、選んだ3事業である。上記「学校運営方針」の「4」はこれから3年間この整備に最優先でとりくむという意味をあらわしている(「5カ年」というのは法人がこの支援事業を実施するのが5年間ということで、各事業は単年度から最長3年間の中で申請・採択される)。見積りをとり精査して申請した計画だったが、採択にあたり申請額の一律10%を減じるという不可解な裁定があり、事業と予算の組み直しに苦勞した。「アナログからデジタルまで」というコピーを学校説明会で使うようになったのはこのときからである。

「ICT」については、教室棟の無線LANネットワーク構築、電子黒板・プロジェクタ等の設置、タブレット型情報端末の導入を眼目として、教育ソフトの活用と研究研修により授業を改善し、「先進的な教育環境の導入により他校に対する優位性を確保し、競争力を高める」ことを目的とした。教室には先進校と同じ青木

黒板製のホワイトボードと日立製のプロジェクタを設置、これ以後に入学する子どもたちにとって「黒板(緑板)とチョーク」は死語になった。

「ほん」については、創立当初からたいせつにされてきた読書教育・図書館教育をさらに充実発展させるべく、「関東学院小学校の100冊の本」選定、教文館ナルニア国の協力による「ブックフェア」実施、作家をまねく「ほんの学校読書会」開催などを計画にあげ、子どもたちの読書意欲を高め、あわせて“ほんの学校”としての認知度を高めることを目的とした。100冊の本の紹介冊子と読書ノートはオリジナルのものを作成した。予算を必要としない6年生対象の「ビブリオバトル」もこの年にスタート、全教員が読み聞かせする「三春台ライブラリー」も2015年度からはじまっていまにいたっている。予算には学校司書の配置も含めており(「5カ年」では人件費も認められていた)、学校図書館担当者の常時2人体制という全国的にもまれな、うらやましがられる配置が実現した。



第1回ブックフェア(2013年11月)

「吹奏楽」については、40年来の伝統があり内外に定評のあった「トランペット鼓隊」を吹奏楽に発展的に改組し、あらたに各種の木管・金管・打楽器を導入、演奏技術の向上と特色のアピールをめざした。中高のマーチングバンド、オーケストラ部との連携も視野に入れていた。

あらたな実施設計が確定した新校舎は7月25日に法人主催で起式をとりおこない、翌年9月からの使用開始にむけて山下設計・清水建設の黄金コンビにより工事がはじまった。

〈まさに、夢の広がる、夢を育む施設が与えられようとしています。ほんとうに感謝でございます。これらの建物に中身をつくっていくのはもちろん小学校の責任であります。ここでこれから行われる教育が、すべ

てまことの創立者である神さまの栄光をあらわすものとなるよう、教職員一同、決意をあらたにしているところであります。〉——「起工式あいさつ」原稿より



新校舎着工(2013年8月)

4・5階に入る礼拝堂にオルガン(本稿ではあえて「パイプオルガン」とは書かない)を設置したいという願いは、前年10月の設計変更のときから実現にむけて動き出した。オルガニストの後藤香織氏に依頼して数少ない日本人のオルガンビルダーとして著名な草苺徹夫氏をご紹介いただき、礼拝堂上手側入り口脇にオルガンの設置場所を確保して設計を依頼した。1ストップ200万円とも300万円ともいわれる費用については、「5カ年計画」と同様に前年度に提案されこの年度からはじまった「関東学院テーマ募金」に小学校として「オルガン奉献」をかけた、広くご芳志をつのった。1期(2013～2014年度)、2期(2015～2016年度)通算して304件、約5,600万円という結果には感謝しかない。

全校礼拝のおはなしを毎週校長がつとめるという本校のスタイルに、初年度はたいへんな思いをした。「牧師じゃないんだ」というつぶやきも、「小学校宗教主任」を任じられていればかき消されてしまう。なんとかしようと、全校礼拝は聖書科非常勤講師との(ときどき教頭をくわえた)輪番制をとりいれた。また、イースター、花の日など教会暦にもとづく特別礼拝には近隣教会の牧師先生おひとかたに1年を通じておはなししていただく、というかたちをとることにして、この年は小宮山剛牧師にお願いした。さらに、創立記念礼拝には卒業生のご協力をあおぎ、神谷智彦氏をおまねきした。牧師と卒業生に毎年おひとかたずつおねがいするというかたちは現在までつづいている。

ルワンダで平和と和解のためにはたらいておられる佐々木和之氏・恵氏ご夫妻には、「国際理解礼拝」としてほぼ毎年お越しいただいている(小学校とのかかわりは2005年から)。献金先の団体から講師に来てい

ただ「友を知る礼拝」は翌2014年度に(命名は2015年度)はじまった。子どもたちにとって、学外の方のおはなしをうかがうことができるよい機会となっている。(ペンテコステや宗教改革記念、横浜大空襲や平和記念礼拝などテーマに応じて講師を招聘して語っていただく礼拝も必要と考えているが、実現はしていない)

教職員のキリスト教理解をふかめるために、毎週月曜日の「子供の座」(2018年度からは隔週月曜日)ではとりあげた賛美歌を解説し、聖書のショートメッセージをつたえるようにしている。オリブの会との共催というかたちをとる「聖書をひもとく集い」(5月から2月まで年9回)では、2012～2013年度は阪井隆牧師(元中高宗教主任)に、2014年度以降は富田茂美宣教師に講師をお願いし、保護者とまなびのときをもっている。富田師になってからは前半を校長による賛美歌解説にあてている。いずれにしてもそれなりの準備が必要で、校長が宗教主任を兼務するのはきびしいものがある。

前年度までの校内研修体制を一新した。2013年度事業計画の重点事業1「運営の改善」に「各種研究研修を通じて教員の資質向上に取り組む。」と記し、研究授業を1人1回(以上)校内で公開、授業後に検討会を開くようにした。翌2014年度の事業計画では新たに重点事業に2「指導力の向上」という項目をたて、(2)研究授業を中心とした校内研修、(3)研修機会の確保と外部研修会への参加、に取り組んだ。研究授業は毎年15～20回おこなわれ(うち全体会が4回ほど、講師も実施)、外部研修については1人1回(以上)の参加を必須とし、ニーズに応じて希望する研修会の参加費を全額補助した。月に2回のペースで研究授業が実施される学校はいそがしいながらも研究的な雰囲気があふれ、教職のキャリアにあわせて指導力の向上が図られた。2020年度からは中断している。

学校だより『からしだね』の毎月発行(2022年4月に第100号を発行)、杉田正樹教授(関東学院大学)による「子どもの哲学」、食育と保護者支援を目的とした美幸軒によるスクールランチ、学校評価のための保護者アンケート、備品の計画的な購入のための予算会議もこの年にはじまり、現在も継続している。就任初年度に準備したものが動き出し、「がらっと変わる」1年(『からしだね』2013年9月、No.5)となった。

年間チャプレン：小宮山剛牧師(日本基督教団逗子教会)

創立記念礼拝：神谷智彦さん(28回生)

国際理解礼拝：佐々木和之さん

読書会：斎藤惇夫さん、藪内竜太さん

[2014年度]

新校舎(管理棟)は予定どおり夏休み中に竣工、8月30日に献堂式をおこなった。総工費約10億円、建築面積758.88㎡、延床面積2898.62㎡、自家発電設備をそなえたRC造地上5階建てで、既存棟と各階で接続しており、べつの建物であることが感じられない一体的な利用ができるようになっている。4階・5階には小学校のキリスト教教育の中心となる礼拝堂を配し、上手側フロアにはオルガン設置予定のスペースがとってある。教員室・事務室等の管理部門は2階に集中し、3階のPC教室、少人数教室、カウンセリングルームなどは新しい教育課題に対応するもの、1階のランチルームは食育を広げていく拠点となる。

〈ひところのはやりのことばで「予算の倍返し、三倍返し」となるよう、有効活用をはかっていきたいと考えています。新しい部屋に入るたびに、あんなこともしたい、こんなこともしたいと、夢が広がっていきます。「夢を育む学校」

子どもたちだけでなく、わたしたち教職員の夢も育んでくれる新校舎です。

与えられました新棟においてこれから行われる教育が、すべてまことの創立者である神さまの栄光をあらわすものとなるよう、教職員一同、決意をあらたにしているところであります。〉——「献堂式あいさつ」原稿より

まる8年がたついまでも、2階のエントランスから入ったお客さまに「きれいな校舎ですね」とよく言われる。近寄ってみればそれなりに使用感は感じられるが、みなさんがそう言うくださるのには校舎をきれいに保つ秘訣があるからである。それは、掲示板以外の場所の張り紙禁止と粘着テープ使用禁止、掲示物は磁石も画鋏も使える多孔ボードが設置された掲示スペースのみとする、という校長令。“岡崎後”もつづけてほしい唯一といっている引きつぎ事項である。

礼拝堂入り口前に赤いカーペットがしきつめられたホワイエとよばれるスペースがある。この壁面に多孔ボードではなく木製の、その筋では有名な(そしてすこしぜいたくな)平湯モデルの掲示板・掲示台を設置した。テーマにそった本を月替わりで展示したり、入学式・卒業式のおいおいのメッセージを掲出したりして、有効活用されている。

入学者の定員割れに志願者数・在籍児童数の漸減傾

向、学則定員に満たない在籍児童数……激変させる特効薬はない。これまで小学校がやってきた常識＝あたりまえをリセットし、できることはなんでもためしてみようと、神奈川の私立小学校入試解禁日(10月20日前後の火曜日)のみに実施していた入学選考を11月下旬にも実施するAB日程制を、この秋の2015年度入学選考から公式に開始した(前年までも入試は2回おこなっていたが、本試験は1回だけ、欠員が生じたので2次試験を実施する、という建前だった)。

公式サイトもリニューアルした。「5カ年」の4つめの事業として「ウェブを活用した広報事業」を単年度事業として2013年10月に申請、採択された予算をあてた(このときは見積額にたいして満額の裁定で、持ち出しがなかった)。サイトの設計を入念にうちあわせ、ブログ形式を導入、学校のいろいろな場面をとりあげた記事を毎週更新するようにした。リニューアル初年度は入試情報なども含めてリリースした記事が127本、平均でPV500/日、ユニークアクセス150/日と報告書にしている。その後、2015年度はPV504・UA157、2016年度はPV557・UA175と、ウェブ広報が有効な手段として定着した。

あわせて単純接触効果、セブンヒッツ理論をねらい、説明会や小学校体験、見学会、行事参観などぜんぶで8タイプの入試広報行事を5月から11月まで一連のものとして配した。翌年度の説明会からは「いつ来ても新しい、来るたびに好きになる」というキャッチフレーズをもちい、学校に何度も足をはこんでもらい、「第一希望・専願」の出願につなげることをめざした。

これらにくわえて学校案内パンフレットやリーフレットのくふうと新校舎効果が相乗して、2016年4月の在籍児童数416名(学則定員432名)を底として、V字とはいえないまでも“し”の字回復に転じ、2018年4月には7年ぶりに在籍者数が学則定員をうわまわり、現在にいたっている。

10月におこなわれる神奈川県私立小学校児童陸上記録会に希望参加する児童が胸につけるナンバーカードを新調した。翌年にはなかよし会のゼッケンを4色のオリジナルビブスに更新した(伝統的に6色編成だったなかよし会は2013年の秋から4色編成に変更)。新校舎竣工記念のポストカード作成とあわせて、関東学院小学校オリジナルグッズの淵源はこのあたりにある。

前年度に導入した予算会議をこの年度から事業計画の重点事業3「教育環境の充実」に位置づけ、「校内予算会議を組織し、先進的な教育活動に必要な備品を計画的に整備する。」(1)備品の整備、とした。教科、担当

部署ごとに数年先を見とおして必要な備品をリストアップしてもらい、会議で検討して年間50万円の予算を配分する。いっぺんに購入できないものも毎年数台ずつ何年かかければ必要数をそろえることができるし、思いつきの個々の備品希望ではなく学校全体を俯瞰した計画的な見方のうえに予算執行ができるようになる。予算の50万円におさまらないものは補助金や寄付金をあてるようにして教育環境の充実につとめ、この年度以降、毎年度重点事業に位置づけている。

11月29日には卒業生の吉田要士氏が主演をつとめるミュージカル『クリスマス・キャロル』を鑑賞した。オリブの会にご協力いただき「親子の集い」拡大版という位置づけにしてチケットを割引販売、約500人の児童・保護者・教員が渋谷のアイアシアタートーキョーに出むき、本物の舞台を堪能した。

「なあ、スクルージ。奉仕って言葉を知ってるか？」

要士氏がのりうつったかのようなマーレイのセリフに“関東学院”を感じた至福のひとつときだった。

小学校のカリキュラムにそった授業・宿題・テスト・補習・講習がどれくらいの力を子どもたちにつけているか、客観的に把握する手段がほしい。「基本的な生活習慣や学習習慣も含めた総合的な学力を形成していくため、指導資料の一つとして」(『からしだね』2014年12月、No.19)、1～5年生を対象にベネッセの「総合学力調査」を導入したことも(実施は3学期始業式の翌日)、この年度の記録としてのこしておきたい。

年間チャプレン：富田茂美宣教師(アメリカンバプテスト協力宣教師)

創立記念礼拝：吉田要士さん(29回生)

国際理解礼拝：佐々木和之さん

友を知る礼拝：松井務先生(聖坂養護学校校長)

読書会：角野栄子さん、杉山亮さん



新礼拝堂最初の卒業式(2015年3月)

[2015年度]

経常費ではまかなえない各校の建物の新設や大規模な改修等は、法人の「施設建設プロジェクト」として実施される(じっさいには各校の施設費、減価償却費などの範囲で予算が認められるのだが、詳細はいくら説明を聞いてもわからない)。新校舎竣工の翌年である。大きなぜいたくはできないとは思ったが、砂ぼこりの舞う校庭に手をつけたいと人工芝化を前年度中に申請し、決裁がおりた。工事は夏休み中に完成し、2学期始業式の9月1日にお披露目。たまたま雨の日だったが、子どもたちは目をかがやかせ、傘をさして校庭に出て行って、できたての人工芝をふみしめて感触をたしかめていた。日照が強いときの照り返しに課題はあるが、転んでも痛くない、すぐに乾く、どろだらけにならない、なにより校舎内が砂だらけにならない……よいことづくめの校庭改修であった。昇降口から走り出ると、どの子もたいていまずひっくり返って寝そべるのがおもしろい。人工芝の校庭をこの年のポストカードにしたのはいうまでもない。



人工芝完成(2015年9月)

校長室の前に広がる空間は教職員・保護者・一般の出入り口として利用しているエントランスである。ここが“ほんの学校”の顔にふさわしくなるよう手を入れた。エントランス正面(校長室ドア横)の壁面に平湯モデルの違ひ棚を設置、木のパズルや積み木を置いて子どもたちが集まれる場所にした。ブックトラック3台には絵本やぬいぐるみ、育児書やキリスト教書をならべて“ひげうさぎ文庫”を開設、保護者に自由に本を手にとってもらえる場とした。ブックトラックのうち2台は特注で、上から見ると「」の形になっている。ことばがつまっていることを象徴したデザインであると、設計者が教えてくれた。

藤城清治の版画もこのときから展示するようになった。大きいサイズの『こびとの楽園』は常設、小さいサ

イズは『こびとのドレミファソラシド』『ラベンダー畑の夢』など寄付により買いたしていき、季節ごとにかけるようにしている(現在では1年間で7枚)。まるごとひっくり返して、コンセプトは“知のエントランス”である。

「学校の3K」と言われる。教育活動が経験と勘と気分でおこなわれることを揶揄したことばである。前例踏襲であったり、行き当たりばったりであったり……そこまでではなかったが、学校の教育活動をピースにわけて「趣旨」「担当」「概要」「留意事項」をもちこんだ「基本計画」というかたちで文書にまとめることにしたのは、新しい革袋に新しいぶどう酒を入れるためでもあった。「教務部」「研修委員会」など校務分掌・担当ごとにA4判1枚(～数枚)にまとめてファイリングした「関東学院小学校基本計画」は、これ以後、教育活動のよりどころとなった。

あわせて『学校生活のしおり(School Life Handbook)』を作成した。関東学院小学校の提供する教育を保護者にも目に見えるかたちで知らせるためである。学則、安全対策、「わたしたちの約束」など、初版は32ページの小冊子だった。その後、各学年やいくつかの教科のカリキュラム、低学年の生活、申請書類など必要なページを加除修正して毎年改定をつづけ、2022年度版は初版の約2倍、60ページになっている。

「5カ年」により2013年度に発足したブラスバンドにユニフォームをつくることにした。トランペット鼓隊タイプ、マーチングバンドタイプ、オーケストラスタイルと検討し、結論はベスト。最終候補3つのデザインの中から採用したのが世界最大のタータンメーカーであるロキャロン社(Lochcarron of Scotland)製のタータンチェックだった。これが関東学院小学校オリジナルタータンであると認定(Tartan Certificate)を受けた、名づけて“Children's Smiles”である(認定は正確には2年後の創立65周年の年)。ベストのお披露目は3月10日の卒業演奏のとき。ブラスバンド発足時から3年間「音をみがき、楽器をみがき、人をみがく」べく活動してきた最初の6年生が、このステージベストにふさわしい演奏を聴かせてくれた。費用は小学校トランペット鼓隊、中高マーチングバンドにかかわりの深い卒業生の方がご寄付くださった(「5カ年」で申請した予算にも含めてあったが、一律10%減額のあおりをうけていた)。

6月3日、横浜文化体育館が4色にいろどられ、新調したビブスがアリーナの照明に映えた(いまなら“ばえた”とルビをふるところ)。10月3日、青空の広がった

中高グラウンドにも、4色の子どもたちと4色の大玉があざやかだった。

学年文集をつくって製本するようになったのがこの年度末で、表紙は学年カラー。いまでは卒業生の手元に学年カラーの文集が5冊のこるようになっている(6年生の卒業文集だけなぜかどの学年も桃色)。

色やデザイン、ネーミングにひと味違う特色をもってきた関東学院小学校を、いまもうけついでいる。

校舎建築のため担当校の順番を入れ替えてもらっていた「キリスト教学校教育同盟第60回東日本小学校教職員協議会」が6月20日、本校で開催された。19年ぶりの会場校として17校から300人をおむかえし、キリスト教学校につとめ志を同じくする先生方とともに、恵みあふれる学び、交わりの一日をすごすことができた。オルガンが完成するのは1年半後で、このときご披露できなかったのが残念である。

年間チャプレン：平田一吉牧師(日本基督教団横浜上原教会)

創立記念礼拝：篠原望さん(14回生)

国際理解礼拝：佐々木恵さん

友を知る礼拝：三森妃佐子さん(日本基督教団神奈川教区寿地区センター主事)

読書会：富安陽子さん

【2016年度】

新校舎建設費用の後年度負担(はっきり書けば借金)こそなかったが、小学校の収支に大きく影響したのが4,000万円増となった新校舎の減価償却費だった。収支バランスのとれた財政運営を確保するため保護者にご負担をお願いすることとし、施設費をこの年度から月額3,000円アップすることにした。ちなみに授業料等もふくめた学費改定は1996年度以来20年ぶりだった(このときは授業料2,000円アップ。20年間すえおきのままの学費でよく運営できたものだ)。

ちなみに、あたらしい事業を導入する際は、まず学校予算や法人の特別事業予算、寄付金等をあてて保護者負担なしで試行実施。ひととおりの実績をつくってから〇〇の効果がある〇〇の事業についてご負担をお願いしたい、というやりかたをとるようにしている。2018年度からのベルリッツ英会話、2020年度からのiPadなどもその方法をとった。また、値上げや負担増については1年前から予告、説明をていねいにくりかえし、理解をもとめるようにしている。

この年度の施設建設プロジェクトに申請したのは児童用トイレの洋式化。教室棟の和式便器をすべて交換し、トイレまわりをリニューアルした(設備にも減価償却費がかかることがわかり、青ざめた)。

オルガンが完成に近づいた。小淵沢の草薙オルガン工房で組み立てられた本体をいったん解体して小学校に運搬、11月から礼拝堂への設置工事がはじまった。クリスマス礼拝ではじめて公式に音が鳴って聖歌隊の合唱をささえ、調整をくりかえして3月10日に奉献式をとりおこなった。奉献記念演奏会では日本オルガニスト協会会長の今井奈緒子氏がうつくしく荘厳な音色をひびかせてくださった。

17～18世紀北ドイツの建造様式による、パイプ数937本、21ストップ(実動17)、手鍵盤2段と足鍵盤を有する本格的な仕様のオルガン。「子どもたち400人以上の賛美歌の声に負けない力を持ったオルガンです」と草薙氏は設計のコンセプトを話しておられた。

〈世界でただひとつ、ここにしかないオルガン。同じものはどこにもありません。「わが母校にオルガンあり」と誇れるものができあがりました。

このオルガンとともに関東学院小学校の賛美をたくさんの人に伝えていきたい。ここからたくさんの音楽を発信していきたいと願っています。〉——「奉献式あいさつ」原稿より

オルガン設置に関する費用は、2期4年にわたりお願いしたテーマ募金により全額をまかなうことができた。それだけでなく、定期メンテナンスや不時の修理があっても、これから数十年は心配しなくてよいだけのたくわえもできた。ご協力くださったみなさまへのお礼とお披露目もかねて、後藤香織氏をおまねきし、「関東学院小学校のオルガン花」と題した演奏会を年度がかわった5月13日に開催した。



オルガン奉献演奏(2017年3月)

2013年度をのぞいてつくっているポストカード、この年度はオルガンをあしらひ、豪華3枚組とした。

「このオルガンは手入れさえすれば100年もちますよ。建物のほうが先に使えなくなる」と太鼓判をおされたオルガンも、経理上は「設備」としてあつかわれ10年のあいだ減価償却費がかかるとのこと。10年後に更新するはずもないが……。

グランドデザインとそれにもとづく「Olive7」が進行中のところ、法人からあらたに「未来ビジョン」を策定せよとの命がくだり、大学・法人編が2014年度から、各校編も2015年度から策定作業がはじまった。2012年度に策定して進行中の「Olive7」と、これから10年間の未来ビジョンとは、期間も趣旨もあきらかにかかっている。「Olive7」の項目を精選して移行すれば手間がはぶけてよいと考え（報告書は両者について毎年もとめられ手間がかかった）、1年半の検討期間をへて、「夢を育む学校」という目指す学校像のもとにⅠ『夢を育む学校』の教育の創出、Ⅱ「豊かな学びと生活を保障する環境整備」、Ⅲ「イノベーション（新しい価値の創造）による魅力づくり」という3つのビジョンをたて、5つの基本戦略・9つの具体的施策（プロジェクト）にまとめた小学校の未来ビジョンを、この年の11月19日にひらかれた「第7回政策レビュー」で発表した。

〈小学校の未来ビジョンはOLIVE7のコンセプトをひきついで「夢を育む学校」をテーマに掲げています。先進的な教育内容とそれをにう教職員、学習をささえ保障する施設設備と教育環境、すべての施策が「夢を育む学校」につながるような構成になっています。

ビジョン（学校像）には前提となるミッション（使命）があります。「子どもたちの笑顔のために」です。キリスト教にもとづく学校としてすべての教育活動が神さまの栄光をあらわすように、というミッションをくぐり抜けていくと、子どもたちの笑顔にたどりつきます。「できた・やった・わかった」というときの「にこっ」という笑顔、安心感・信頼感のある居場所にいる「ほっ」、ほめられ認められたときの「ぽっ」、「うわー、すごい」という出会いや感動の笑顔。そして子どもたちの笑顔を見ておとなたちも笑顔になる。卒業のときに子どもたちが「6年間やりきった！」という笑顔を見せてくれることを使命として夢を育む学校を目指す、というわけです。

10年後の関東学院小学校はこうありたいという学校像には、草創期に提起されうけつがれてきた「学院の特別な小学校教育」という先達の強い思いが投影されています。ここでしか経験できない特別な6年間がある、子どもをここに託したい、そんな思いを多くの人たちに共有してもらえるような学校でありたいという願いです。〉——『WE CAN DO IT!』2016年11月22日、

No.295

このときに“裏ビジョン”として「等身大のラグジュアリー」ということばをつかった。「横浜の中心部にあるキリスト教にもとづく私立学校である関東学院小学校」というステイタス、“関東ブランド”を希望する層の思いを表現したイメージで、そうずれてはいないはずである。

各校の未来ビジョンは翌2017年度から正式にリリースされる。これに予算がつくことになっており、つかわない手はないと、ベルリッツ英会話の試行実施（2018～2019年度）、教員のICT機器更新＝iPad Pro導入（2019年度）、デジタル教科書の導入と学校図書館蔵書管理システムの更新（2020年度）、そして高学年児童1人1台のiPad導入（2020～2022年度）を申請、満額の補助をいただいて事業をすすめることができた。

英語教育の新たな取り組みとして夏休みに「イングリッシュ・キャンプ」を希望制で実施することにした。成田のラディソンホテルに泊まって英語漬けの3日間をすごす。同じホテルに投宿する航空会社のクルーをディナーに招いたり、最終日に成田空港の発着ロビーで突撃インタビューを敢行したりする本校オリジナルメニューが人気を博し、5・6年生のうち3割ほどが参加、フォニクスとあわせて英語教育の目玉となっている（2019年度まで4回実施したところで2020年度と2021年度は休止、2022年度は校内で実施するかたちで復活した）。

この年、黄色い大きなペナント型のなかよし会旗を新調、手書きだったにじの会のうたの幕もあらたなデザインをプリントした布製のものを新調した（ものの会バージョンは翌2017年度に新調）。創立以来たいせつにしてきた手づくりのよさもあるが、年季のはいった備品はすこし費用をかけてでも更新し、あらたなオリジナルをつくっていかうという未来ビジョンⅢの趣旨を展開したものである。

年間チャプレン：小野慈美牧師（捜真バプテスト教会）

創立記念礼拝：星淳一さん（20回生）

国際理解礼拝：佐々木和之さん・恵さん

友を知る礼拝：小澤淳一先生（チャイルド・ファンド・ジャパン理事）

読書会：岡田淳さん

〔2017年度〕

1952年4月に「関東学院小学校三春台分教室」としてスタート。翌年「関東学院小学校」と改称し「学院の特別な小学校教育」をめざしてきた関東学院小学校が、この年、創立65周年をむかえた。節目の年をどのように計画しようとしたか、『からしだね』(2017年4月、No.45)から抜粋する。

〈この1年を「創立65周年記念イヤー」と位置づけ、子どもたちの思い出にのこる年にしたい〉

〈時間をかけて準備した大きな行事を特別に開催するというのではなく、日々の授業や学年、学校の行事に65周年の趣向をこらした企画をくわえ、例年とはひとあじちがったものにする〉

〈2014年の新校舎建築から人工芝設置、トイレ改修と年をおって順次ととのえてきた学習環境について、今年度は65周年記念事業に位置づけ、教室・廊下の改修と屋上プール階の整備を実施〉

〈記念品、記念誌、記念グッズなどの計画も〉

〈アイデアとセンスでどんな“65周年”がうまれるか〉

10月6日の創立記念礼拝には創立当時から約20年にわたり教鞭をとられた西野禮子先生をおまねきし、坂田祐先生(学院長・初代校長)、水船六洲先生(第三代校長)の興味深い思い出をたっぷり語っていただいた。

この日にあわせて記念品としてオリジナルタータンの大小2枚組ハンカチセットをプレゼント(850セット作成、関係者に気前よくさしあげた)。教職員には校章と各自の氏名が刻印されたネームフォルダをつくった。オリブの会にあつかっていただいたロキャロン社のマフラー(ロゴ刺繍入り・ラムウール100%・1本5,000円)は400本を受注(最終的に480本を完売)、オリジナルタータンをまとった世界でただ一体のテディベアはこの年度から大判化したポストカードのモデルとなり、翌年度以降の小学校オリジナル品のモチーフと



65周年記念ハンカチセット(2017年10月)

なっている。

例年おこなっている行事などに「創立65周年記念」と冠をつけ、ひとつくふうしたアイデアをくわえてみた。なかよし会では、春は教員による玉入れを、秋には全校児童と教員、保護者参加による大玉ころがしを特別種目として実施した。9月はじめの「夏休み児童作品展」には教職員の作品を展示、2月の学習発表会では過去の小道具やシナリオを展示した。

本校には40周年、55周年の製本された記念誌がある。60周年のときには手がつけれなかったので、この機会につくることにした。

〈右開きにめくっていくと、関東学院小学校の“ビフォー&アフター”があらわれます。65年のときを経て変わったこと、変わらないこと。学校の“むかし”と“いま”が対照できるように編集しました。[中略・左開きにめくると]関東学院小学校の“いま”を見ることができます。新校舎建築をはじめとして60周年から65周年にかけて教育環境も学習内容も大きく変化した小学校。現在の姿を記憶にとどめ、5年後、10年後、20年後... 未来の子どもたちに伝えたい、そんな願いをこめました。〉——『からしだね』2018年5月、No.57

A5判・上製本、白を基調としたデザインで、写真をふんだんにとりいれた両A面のユニークな記念誌は翌年の4月に発刊のはこびとなった。



ブラスバンドステージベスト(2017年12月)

これらの事業を実施する裏づけを確保すべく、テーマ募金3期(2017～2018年度)のテーマを「創立65周年記念事業募金」としてご芳志をつのった。2年間で140件、約2,800万円の実績はほんとうにありがたかった。2018年度に設置した大型遊具、2018年度以降毎年つくっているミニタオルやポストカードなど、65周年の1年間にとどまらず70周年にむけたあゆみをつづける周年記念事業に活用している。

施設建設プロジェクトを創立65周年記念事業に位置づけ、教室棟の学年教室と廊下を年次進行で改修する計画をスタートさせた。まず4階、卒業までの時間がみじかい高学年フロアから。教室と廊下の内装一新、ランドセルがたてに入る特注ロッカー設置、掲示板に多孔ボード採用、照明のLED化などの改修を実施。70周年にむけてすべてのフロアを改修し、校舎更新まであと20年はずいぶん整備にとりかかった。

教室棟屋上にあるプールも施設建設プロジェクトの予算で改修した。あざやかなオレンジとグリーンでいろどられたプールサイド、飾り窓から見晴るかすランドマークタワー。リゾートホテルとみまがうほどの絶景ポイントができた。

この年、2014年度にブログ形式を採用してリニューアルした公式サイトも一新した。スマートフォンでの閲覧割合がふえつつあるのを先取りして、画面サイズにあわせて表示が自動で最適化されるレスポンシブタイプを導入、7月から発信を開始した。65周年以降のイノベーションを発信する効果的な広報手段となっている。

2020年度から完全実施される新学習指導要領が、新年度開始直前の2017年3月に告示された。英語の教科化、プログラミング教育の導入などを柱とした10年ぶりの改定である。

〈私立学校である関東学院小学校は、その特性をいかした独自のカリキュラムを編成し教育活動を展開しています。独自性を志向しつつも、学習指導要領に示された内容の一定の制約もあります。そこで、小学校のあらたな教育課程を編成するため、昨年度から教職員の協議をスタートさせ、準備にとりかかっています。教科の学習内容はもちろん、授業時数のバランス、一日の生活時間、学校行事の見直しや精選、関東学院中高との教育連携など、さまざまな観点から検討をすすめています。指導要領の求める教育と本校の育てたい子ども像との異同を見きわめ、立ち位置を明確にして2020年度にそなえる年となります。内容によっては前倒しして実施することになるものもあろうかと思えます。〉——『からしだね』2017年4月、No.45

「教育課程編成会議」として検討を重ね、2018、2019年度の移行期間の教育課程を決定、1月に保護者に報告した。学則の改正は校長会議・理事会の議決を経て2018年3月、県に届け出た。1単位時間の40分から45分への変更、5・6年生の英語の授業時数増を骨子とし、別表の授業時数を現状にあわせて改定した。

2017年度から実施されている道徳の教科化について

はいっさい対応していない。キリスト教学校の矜持である。

〈さいごに、なぜ「65」周年なのか。5年前、60周年のときには校長交代に校舎解体がかさなり、準備も環境もととのわず、ポストカード作成以外の記念事業ができませんでした。つぎの節目は人間の古稀にあたる「70」か、はたまた四分の三世紀ときりのいい「75」か。それではすこし先になってしまいます。じつは5年ごとにきざんでいくと、どの学年の子どもたちも在学中1回は節目の年度にあたることになります。それで「65周年記念イヤー」とあいなつたしだい。いまの6年生は60周年に入学して65周年に卒業、1年生は65周年に入学して70周年に卒業という、どちらもメモリアルな学年になります。〉——『からしだね』2017年4月、No.45

65周年の高揚した1年間をおえ、つかのまの休息期間にあった2018年3月末、訃報がとどいた。4年生の白濱里織さんがスキー中の事故で天に召されたという知らせだった。4月6日、2018年度始業式の日に告別式。いっしょに5年生になるはずだった子どもたちとともに久保山にむかい、「お別れのことば」をのべた。

〈わたしたちの「夢を育む学校」の子どもとしてともに学び、育ってきた里織ちゃん。卒業までしっかりとおあずかりしたいと思っています。〉

ほんとうに急で、思いもかけないできごとに、深い悲しみの中にあるお父さま、お母さま、ご遺族のみなさまのうえに、神さまの慰めと平安とが豊かにありますよう、お祈りいたします。〉

夏休み中に工事をして、ホワイエに里織さんの思い出のコーナーをつくった。里織さんの写真と作文はいまも在校生を見守ってくれている。

〈友達は、わたしにとって、とてもたいせつな存在と思えます。〉

それは、けがをした時に助けてくれたり、遊んだりしてくれるからです。

だから、いっぱい友達を作ろうと思っています。

これからは、わたしが助けてあげてやさしくしてあげたいと思いました。

そして、ついにクラスの全いんと友達になりました。〉——「友達を作るには」白濱里織さんの作文(4年学年文集より)

年間チャブレン：中島聡牧師(日本基督教団清水ヶ丘教会)

創立記念礼拝：西野禮子先生(元教員)

国際理解礼拝：佐々木和之さん

友を知る礼拝：鈴木実先生(日本聾話学校校長)
読書会：斉藤洋さん

【2018年度】

1単位時間を変更し45分とする、日課表を改定する、行事を精選し教科との関係を整理するなど、2020年度からのあたらしい教育課程実施にむけた2年間の移行期間がスタートした。

改定される学習指導要領の英語については、中学年に「外国語活動」年間35時間の導入、高学年では英語が教科化され年間70時間(週あたり2コマ)実施、の前段階として移行期間の2年間は年間50時間実施、とされている。それまで全学年で英語が週1時間ずつあったので、中学年についてはクリア。高学年に求められた時間数を満たすためにこのときに導入したのが「ベルリッツ」である。大手英会話教室のベルリッツから講師を3人派遣してもらい、1クラス36人を3分割した少人数の英会話を年間15コマ導入。小学校にあわせたカリキュラムを提案してもらい、現行の英語の授業とすみわけよううちあわせをつづけている。費用については未来ビジョンのプロジェクト予算を申請、年間15時間×2学年の委託事業(2年間で750万円)が承認され、学校も保護者もあらたな負担なしで試行期間の2年間は実施することができた。中高の英語科でも同時期にベルリッツを導入しており、小学校から中高まで教科内容でのつながりができることになった。ベルリッツ英会話は2020年度からは年間30時間とし、(授業料を値上げして)経常費から支出している。

プログラミング教育についてはレゴWeDo2.0を20セット、ご寄付により購入、手さぐりでスタートした(その後、1～4年生は「総合」の授業にScratchを導入)。

施設建設プロジェクトは3階、中学年のフロアを前年度の4階と同じ仕様でリニューアル。夏休みあけから4つの学年が「きれい！」な教室で過ごせるようになった。屋上プールの濾過機も1月に交換した。これまでの施設建設プロジェクトは児童・保護者の目にみえるかたちでリニューアルをすすめてきたが、目に見えないところにも手を入れる必要があり、新年度以降も心配なくプールをつかうために濾過機の更新に踏み切った(校庭から屋上までクレーンでつりあげる工事はみものだった)。

2013年夏に設置して5年が経過した教室のプロジェクトをこの年度開始前の春休みに更新、児童全員が各教室で接続してもフリーズしないようなアクセスポイ

ントの増強などWi-Fi環境の整備はこの年の年度末に手がけた。

校庭に大型遊具を設置する計画をすすめた。前年度中に検討をはじめ、校庭の形状を考慮して設計された大型遊具(ネーミングの機を逸し、いまも「大型遊具」と呼ばれている)が完成、11月21日に奉献式をおこなった。クライミングの要素をふんだんに取り入れた世界にひとつだけのカラフルな遊具は小学校のランドマークとなり、休み時間には子どもたちがむらがり歓声がひびいている。設置費用についてはテーマ募金を活用。校庭周囲の植え込みを伐採して整地する、鉄棒を移設し増設するなどの工事も含めて約1,200万円を65周年記念事業募金から支出した。昨年度大判化した周年記念のポストカードにこの遊具をあしらったのは当然のなりゆきである。



大型遊具完成(2018年11月)

ありきたりのノベルティグッズは小学校らしくない。あれこれ試行錯誤したすえにできあがり、大好評だったのが65周年記念のハンカチセットだった。今年度もなにかしら記念になるものではないかと考え、ティディベアをデザインしたミニタオルを作成、66周年の創立記念礼拝の日に子どもたちにプレゼントした。校章と今治タオルのタグがついたこのタオルは、その後69周年まで4つのデザインで制作することになる(吸水性の基準により今治製のブランドを示す赤いマークはつけられなかった)。

オリジナルタータンをあしらったメモパッドとレターヘッドも制作した。未来ビジョンの「関東学院オリジナル」「毎年イノベーション」が浸透し、保護者会も聖書カバーやランドセルカバー、トートバッグ(3サイズ展開!)などオリジナル品を企画、いっしょにたのしんでくださるようになった。

関東学院オリジナルのシンボルとしてこの年度にし

あがったのが、クリスマスに5年生の聖歌隊が着用するガウンだった。おそらく数十年にわたりうけつがれてきたであろう伝統の品だが(本校卒業生の教員が「自分も着た」と言っていた)、経年劣化ということばもある。襟元にタータンをあしらひ、シャンパンゴールドの糸で校章を刺繍したあたらしいガウンを、この年のクリスマス礼拝でお披露目した。5年生の聖歌隊、6年生の聖書朗読者など、これを着用することができる“誇りと責任と喜び”(子どもたちへの激励のことば)をもって舞台に立つようすすめている。

アドベントのろうそくをともしアイアンワークスの燭台も特注品ができあがり、この年のクリスマスからつかいはじめた。

これまで学校で栽培した花を飾っていた6月の花の日礼拝。「家庭からお花を1本ずつ持ち寄って礼拝堂を飾る」という試みをこの年度から導入した。あわせて花の日礼拝とクリスマス礼拝、年に2回ささげている献金を入れるための封筒を制作(これも校章入りのオリジナルデザイン!)、子どもたちが聖句や絵を書いて献金をささげるようになった。

70周年にむけたあゆみの第一歩と位置づけたこの年度。65周年の事業が一過性におわらず、つねに動いている、わくわくする学校を演出する……子どもたちの笑顔のための“毎年イノベーション”が文字どおりとなった1年だった。

ここで、この演出を裏方としてささえてくださっている「高陽印刷」と「学校制服のつつい」についてしっておきたい。どちらも卒業生のかかわる会社である。高陽印刷さんは学校案内パンフレットから記念誌、メモパッド、封筒、読書ノート、「はげみ」のファイルな

ど印刷物から公式サイトまで、つついさんはプラスバンドのステージベストにはじまって聖歌隊のガウン、ハンカチ、ミニタオル、フォトフレームからマフラー、ストール、テディベアまで。こまごまと相談にのってくださり、本校にふさわしいオリジナルの逸品を提案、制作してくださっている。

しかしながら、自己評価とは裏腹に、2月に実施した保護者アンケートの結果は急落していた。「1年を通じた満足」が前年までの3.5から3.2に、「保護者と連携した教育活動、教育相談」も0.2ポイントさげて過去最低ラインにおちるなど、前年とくらべられる9項目のうち8項目がポイントをさげてしまった。気をぬいたわけでも手をぬいたわけでもなかったはずだが、「働き方改革」の影響による勤務時間対応と業務改善がうまくいかず、一つひとつのしごとがじゅうぶんな準備のもとに遂行できたとはいえなかったことが、いくつかある要因のひとつ。もうひとつについてはつぎのように総括した。

〈年々高まっている保護者のみなさまの学校への期待にこたえようと誠実に努力してまいりましたが、年度途中でさまざまな事情で3学級の担任が交代せざるをえなくなるなど、とりわけ子どもたちを不安にさせてしまい、また保護者のみなさまにもご心配をおかけしてしまいました。まず教職員の体制をととのえ、新年度をむかえたいと考えております。〉——『からしだね』2019年3月、No.66

(学校評価の公開という意味もあって、毎年度3月の『からしだね』に保護者アンケートの結果を数値で、またそれをうけての见解を掲載している。数値については「満足=4」から「不満足=1」の4段階評価を平均して算出、2.5が中央値)



聖歌隊ガウンリニューアル(2018年12月)

顧問弁護士とはべつに学校の法律問題を専門にあつ
 かってくださるスクールロイヤーが、法人の肝煎りで
 2019年3月に契約されたことも付記しておく(当初は1
 名、2021年7月から2名)。事故やケガ、クレームなど
 対応をあやまれば大きな問題になりかねないケースに
 ついて専門家の立場からアドバイスをいただくことが
 でき、心強い制度となっている。

年間チャプレン：高橋彰牧師(日本バプテスト同盟関
 東学院教会)

創立記念礼拝：小野寺進さん(12回生)

国際理解礼拝：佐々木和之さん

友を知る礼拝：古田伸哉先生(横浜訓盲学院教頭)

読書会：松岡享子さん

【2019年度】

「夢のたまご」ということばが公式に登場したのは
 2018年11月だった。『WE CAN DO IT!』(2018年11月
 20日、No.345)と『からしだね』(2018年12月、No.63)に
 書いた「『夢のたまご』を見つけよう」という文章がそれ
 である。2019年度からはじまるテーマ募金4期(2019～
 2021年度)のテーマを設定せよとのお達しが2018年7月
 に法人からあり、「“夢たまご”応援募金」というテーマ
 をたてたのだった。

「夢を育む学校」では、小学校のあいだにひとつの夢
 に出会い、思いをひとつにかためなければならないよ
 うな印象が持たれないともかぎらない。そうではなく
 て、たくさん“ほんもの”に出会うことで自分の夢に
 つながる「夢のたまご」をいくつも見つけられるよう
 に、見つけた夢のたまごに自分なりの色やもようをつ
 けていかれるように、そのためのきっかけ＝夢のたま
 ごに出会う機会を小学校のあいだにたくさん用意す
 る、というコンセプトである。これまで小学校でとり
 こんできた“本物に出会う教育”が「夢を育む学校」につ
 ながるように、一貫した意味づけをしたものでもある。

かくして2019年4月に「“夢たまご”プログラム」をリ
 リース。裏づけとなる資金を確保し、出前授業の講師
 謝礼、特別な備品の購入費用、ステージ出演の運送費
 用などがまかなえるようにした。この年には鈴木優人
 さん率いる世界的なバッハ演奏団体「バッハ・コレギ
 ウム・ジャパン(BCJ)」のコンサートを12月10日に礼
 拝堂で開催することができた。大きなたまごを提供す
 ることができた初年度だった(BCJのコンサートは3年
 つづきで予定していたが、2020、2021年度はコロナの
 ため実現せず。2022年度の創立70周年記念事業の一
 つとして2023年2月にみなとみらいホール大ホールで

の記念コンサートを計画している)。

2020年度から完全実施される学習指導要領に本校の
 教育課程を(すくなくとも形式上は)あわせる必要があ
 り、検討をすすめた。2018年度からの移行期間のため
 にすでに大筋の方向性は議論されており、それをもと
 に完全実施の体制をととのえた。各教科の年間授業
 時数を確保するため「朝の学習」の時間をもうけるこ
 と、移行措置期間に50時間であった5・6年生の英語を70
 時間とすること(内訳はベルリッツを年間15時間から
 30時間に、あと5時間としてTokyo Global Gateway
 (TGG)での英語体験学習を設定)、が大きな変更点で
 ある。学則については校長会議・理事会の議を経て
 2020年3月に県に届け出、受理された。

今次改訂の目玉とされた「主体的・対話的で深い学
 び」(アクティブ・ラーニング)については現行の授業
 のなかに包含されると判断し、とくに対応はしなかつ
 た(数年のうちに下火になる、という見とおしもあつ
 た)。

年間計画のなかで特筆すべきはなかよし会の変更で
 ある。これまで「春の屋内なかよし会」として横浜文化
 体育館で、「秋の屋外なかよし会」として中高グラウン
 ドで年2回実施してきたなかよし会を、春秋ともに屋
 内で実施することにして、2020年度について春は横浜
 文化体育館を、秋は2020年8月竣工予定の横浜市の新
 しい施設「横浜武道館」を予約した。設備の充実した新
 施設でのなかよし会は「夢たまご」の目玉のひとつに
 なるはずだった。

ベルリッツについて移行期間の2年間は未来ビジョ
 ンのプロジェクト予算がついたので、実質の保護者負
 担はゼロだった。しかし、2020年度の本格導入からは
 学校予算からの支出となる。ベルリッツを含めた新教
 育課程の実施にともなう経費増額分等について保護
 者にご負担をお願いすることとし、2020年度から授業
 料・校費を月額5,000円アップすることを決定した。
 あわせて入学検定料2,000円と入学金80,000円・特別施
 設費20,000円の増額も決め、2020年秋の入学選考(2021
 年度入学者)から適用することとした。ベルリッツに
 くわえて、ICT機器の整備充実、教員の学年3人体制
 の確保、東門の常時警備費用、そして10%になった消
 費税負担分も含めた学費改定であることをこの年度当
 初から保護者に説明し、理解と協力を求めた。授業料
 の改定が1996年度(当時の消費税は3%)以来24年ぶり
 となることは先述のとおりである。

ICT機器を活用した教育を5年先を見こして推進するため2020年度から5・6年生に1人1台のiPad(セルラーモデル)を配置することを決め、未来ビジョンのプロジェクトNo.1「新しい教育課程の編成」として予算を申請した。ペリリッの先行実施につづいてこれも満額が承認された。2013年度に導入したiPad(第4世代のWi-Fiモデル、全校で40台!)の更新にあたり、GIGAスクール構想がうちだされる前の決断であり、これにより2020年4月からまったくあたらしい学校のすがたが現出することになるはずだった。

また児童用の導入に先立って、教員用として4月からiPad Proを1人1台ずつ配置した。第3世代・12.9インチのセルラーモデル、付属品としてSmart Keyboard、第2世代Apple Pencil、Apple TVもつけたフル装備で、2018年度12月に未来ビジョンの事業として申請し承認されたものだった。

年次計画で進めている施設建設プロジェクトによる教室棟改修工事は、2階の低学年教室と東階段の内装工事が夏休みのあいだに完了。これですべての学年があたらしい教室で生活できるようになった。熱中症対策としてランチルーム前の軒下にドライミストを6月に設置した。

教員の勤務時間について労使の合意がなり、平日の勤務を8:10~17:10として土曜日を法定外休日とする、土曜日に勤務した場合には法定外休日勤務手当を支給するという制度が、院内ではじめてこの年度から導入された。懸案がすべて解消されたわけではないが、一歩前進したことはたしかである。労働時間把握のためタイムカードは前年度8月に導入されていたが、システム上の課題があって活用されているとは言い難い。

コロナの感染拡大(第1波)のため、年度もおわろうとしている2020年3月2日から一斉休校となった。卒業式こそ規模を縮小したかたちで実施したものの、このあと3か月、5月末まで休校がつづくことになる。

混乱のなかにあって、2020年3月16日、第64回卒業式において白濱里織さんのご両親に卒業証書をおわたしし、里織さんが同級生といっしょに卒業できたことはなによりであった。

年間チャプレン：松田和憲学院長
創立記念礼拝：山口賢さん(25回生)
国際理解礼拝：佐々木和之さん
友を知る礼拝：伊藤紀子先生(横浜訓盲院施設長)

読書会：吉野万理子さん

[2020年度]



青空入学式(2020年4月)

3月にはじまった一斉休校措置につづき4月7日に出された「緊急事態宣言」と2度の延長により、入学式だけは4月5日に校庭で実施したものの(青空入学式とよんでいる)、子どもたちが登校を開始したのは6月2日だった。はじめは四分の一ずつ(児童1人につき週1回の登校)、それから二分の一ずつ(それぞれの児童が隔日に登校)の分散・時差登校とし、全校児童が一斉に登校したのは7月13日になってからだった(感染リスクの懸念される昼食は6月29日から)。

学習は、3月の休校期間中はプリント対応、4月になってからは教科書や教材を送るとともに、「まなびポケット」のアカウントを全員にわりあてて課題を毎日配信するというオンライン授業(オンデマンド授業)をおこなった。また新5・6年生には春休み中に納品されたiPad(第7世代・セルラーモデル)を送り、学習にMetaMojjiのClassRoomを使ったりホームルームにZoomを利用してみたりした。

現時点でふりかえれば「同時一斉双方向のオンライン授業をしています」とはお世辞にも言えるような体制ではなかったが、文字だけで双方向のやりとりをしたり、礼拝やメッセージの動画を送ったりして、この時点でできることにはすべてとりくんでいた。自宅にカンヅメになっている子どもたちに笑顔が失われているのがなによりつらく、子どもたちを励ましたいと送った動画に「ひさしぶりにたくさん笑いました」とメッセージがはいっているのを読み、すくわれた気がした。

以下、1学期と夏休みに中止した教育活動・学校行事を記録しておく。

- ・教育課程：委員会活動、ぶどうの木子供会、遠足、春の屋内なかよし会、みどりの学校、学力テスト、全校一斉計算テスト、漢字検定、ベルリッツ英会話、出前授業、水泳学習、プール開放、子どもの哲学、教会訪問、社会科見学、イングリッシュ・キャンプ、スクールランチ、スクールランチ試食会、四科健診、交通安全教室、方面別下校、引き取り訓練、携帯講習、授業参観、校内研修、成績評定(6年4教科のみ評定)
- ・入試広報関係：学校説明会、小学校体験、学校見学、イブニングKANTO、のぼ園バスツアー、フォーラム、情報フェア、施設貸与(模擬テスト・合宿)
- ・オリブの会：総会、親子の集い、クラス委員全体会、4委員会、学期末全体会、コヘレトSG、聖書をひもとく集い、みもれ会、エクレシア
- ・たんぽぽの会：総会・懇親会
- ・出張・研修：半日研修会、教育同盟教職員協議会、日私小連全国教員研修会、教頭研修会
- ・そのほか：オルガンコンサート『パイプオルガンと横浜の街』

この年度は、3～5月の第1波、7～8月の第2波、1月ピークの第3波(1月7日に2度目の「緊急事態宣言」)の時期にあたっていた。感染力、重症化リスク、感染防止対策などわからないことだらけで、学校でおこなうすべてのことに慎重にならざるをえなかった。しかし、ただ手をこまねいているだけではなかった。最後のさいごには「できない」という判断にならざるをえないにしても、どうしたらできるか、例年とは違ってでもべつのかたちで実施することによって当初のねらい、目的を達することはできないか、さまざま検討した。結果として、全校があつまって密になる可能性のある「なかよし会」は春は中止、秋は代替行事として1学年ずつ中高グラウンドに行き、色別リレーと学年競技を実施、そのような教室に配信して応援しあった。宿泊をとまなう「みどりの学校」も全学年中止としたが、感染が比較的小さまっていた10月には徒歩で行ける近隣の公園に遠足を実施。1年間をふりかえってこの遠足が「いちばん楽しかった」と作文を書く低学年の子がたくさんいたのがかわいそうだった。秋のなかよし会で初めて利用する予定だった横浜武道館は6年生が遠足のかわりに行き、広いアリーナで思う存分からだを動かした。ビブリオバトル、三春台ライブラリー、ブックフェア、読書会は開催形態をくふうして実施した。オリブの会のみなさんもくふうと苦勞のすえ、6年生は対面、下学年は配信のハイブリッドでオリブ祭を開催してくださった。

礼拝も「どうしたらできるか」のくふうに心をくだいた。一斉休校中は録画した動画を家庭に配信。登校再開後はからっぽの礼拝堂から各教室にZoomで配信したり、1学年または2学年を入室させてほかの学年には配信される礼拝に教室で参加させたりした。クリスマス礼拝は無観客(観客というのかどうか)で実施、5年生の聖歌隊が児童席にひろがって賛美をささげ、壇上から聖歌隊を撮影してZoomで配信した(翌年のクリスマス礼拝からYouTubeに変更)。チャプレンをお願いした野口成行牧師にはたいへん申し訳ない1年だった。

「どうしたらできるか」の集大成は2月の学習発表会だった。学年ごとに20分ほどの動画をつくって発表することにして1月から準備を開始。撮影、編集を経て2月19日に一斉にリリースして鑑賞し、1年間の苦勞と成長をわかちあった。この動画作成を期に教員も児童もiPadとアプリのスキルが格段に向上したように感じる。

コロナのあいだの学習をささえたのが1人1台ずつ配布したiPadだった。未来ビジョンのプロジェクトとしてこの年度から3年間、5・6年生に1人1台ずつセルラーモデルのiPadを配布して活用する計画だった。5・6年生については休校が継続されることになった4月のはじめに宅配便で家庭におくったが、下学年については予定していなかった。しかし、コロナ時代の学習を保障するため(この時点では一斉休校がどこまでつくか見とおせなかった)、また国がすすめるGIGAスクール構想を先取りするため、学校負担で4年生以下にも導入することを決め、4年生にはセルラーモデルを8月に配布。1～3年生にはWi-Fiモデルの調達を決めて手配、11月までには全員が使い始めることができた。MetaMoJiの学習支援アプリClassRoomをつかって学習への活用が一気にすすんだ。

全校で40台を共用する時代と1人1台になってからとでは、iPadの位置づけががらっと変わった。入試広報で使っている「教科書・ノート・筆箱・iPad」というコピーは、iPadがいつでも取り出してあたりまえに使う文房具のひとつとなったことをあらわしている。

入試広報の活動も多難をきわめたが、学校紹介の動画を制作したり、学校説明会をライブ配信したりして、困難のなかにあっても前進する学校をアピールした。入学選考は予定した内容をA日程は二部制で実施。B日程とあわせて、総志願者数は前年度から若干減少したものの、募集定員をうわまわる入学予定者を得ることができた。

施設建設プロジェクトは体育館の床、壁面の改修を夏休みに実施、コロナ関連の特別予算を活用して児童用流しの蛇口をレバー式に変更(いまとっては効果があったのかどうか)、第3波と第4波のあいだの2月には5・6年生がTGGでの英語体験学習に参加、かなり年季の入っていた入試のゼッケンをビブスに新調したのもこの年度の特記事項である。

そしてもうひとつこの年度の特記事項。専任教諭の定数15人という学則のしほりがあるなか、専任教諭の枠を複数の契約教諭にふりわけるかたちで教員増をはかってきて、この年度、専任教諭と契約教諭あわせて18人にして学年3人体制をとることができた。級外ではなく“級内”の学年担当として、補助ではなく3人目の担任として3人のチームワークがとれるようになれば、学校を前にすすめる大きな原動力となるはずである。

毎年2月をお願いしている「学校評価のための保護者アンケート」はGoogleフォームで実施した。2018年度に一気にさがった評価は、懸命のコロナ対応を認めてくださったこともあり、2年間で以前の水準をとりもどすことができた。

〈“これまでどおり”が通用しない状況で、ひるまずあきらめずに前例のないことにとりくむ。新しいものをつくりだそうという気概をもって挑戦する。その結果のさまざまな“ことしの”が、ポストコロナを先取りするものとなり、「古を作る」ことができた、これからのスタンダードをうちたてることができたのではないか。そんな自負とともに2020年度をおえようとしています。〉——『からしだね』2021年3月、No.88

新教育課程初年度(であり新学習指導要領の本格実施の年)になるはずだった2020年度は異例づくめの1年間となり、第4波の感染拡大とともに2021年4月、つぎの年度をむかえることになった。

年間チャプレン：野口成行牧師(日本バプテスト同盟横浜南キリスト教会)

創立記念礼拝：滝沢聡教諭(20回生)・徐奈美教諭(24回生)・市川亜紀子教諭(32回生)

友を知る礼拝：中止

読書会：村上雅郁さん

[2021年度]

コロナ2年目となる2021年度は、

- ・4月からの第4波(4月20日「まん延防止等重点措置」、8月下旬まで延長4回)
- ・五輪狂騒曲にともなう7～9月の第5波(8月20日「緊急事態宣言」、9月末まで延長)
- ・1月後半から急増した第6波(1月21日「マンボウ」、3月末まで延長2回)

と、10～12月以外の1年の大半がなんらかの制限期間にあたっていた。

1年目の経験があるので「どうしたらできるか」の選択にも幅が出てきたが、感染の波の山と谷を予測することはむずかしく、宿泊をともなう「みどりの学校」は2年つづけて中止、「宣言」との違いがよくわからない「マンボウ」期間中とて水泳学習も中止、横浜武道館での「春のなかよし会」も実施できなかった(5・6年生だけで施設を利用して2種目を実施)。

しかし、のちに“黄金の3か月”といわれる2学期後半は感染状況がおちついており、11月4日に全校一斉の避難訓練を実施(子どもたちがひとつところにあつまったのは2020年2月28日のとつぜんの修了・卒業・退任の会以来)、翌日には秋のなかよし会を横浜武道館で開催した。全校児童と保護者(各家庭1名)が一堂に会したのは2019年9月の秋の屋外なかよし会以来2年ぶりだった。

「関東学院小学校の子どもって、こんなにたくさんいるんだね」

低学年の子どもたちの感慨である。

この時期には各学年の遠足も実施にふみきり、バスをつかう学年は通常2台のところ3台利用とした。座席には交互にすわる、乗車しているあいだは黙っているなど窮屈な思いもさせたが、学年のみんなと出かけてたのしむ経験を味わわせることができた。6年生は八景島シーパラダイスとキッザニア東京につづけて出かけ、天国のような1週間だった。

オリブ祭は2年つづけてハイブリッド開催。礼拝堂には6年生がはいり、プレイキンの世界チャンピオン Shigekixさん、RAMさんの妙技を堪能した。前年度はオンライン開催だったみなとみらいホール主催のオルガンコンサートも、礼拝堂に一般客が入る有観客で実施することができた。

また、プラスバンドのクリスマス演奏は礼拝堂に2学年ずつが交替ではいり3部制で発表。クリスマス礼拝は5年生の聖歌隊が並び方をくふうして壇上に勢ぞろいし、5・6年生の保護者が列席するなか、音質のよ

いYouTube配信を利用してクリスマスのよろこびをともにすることができた。

ふりかえればたしかに“黄金の3か月”だった。

これに先立つ9月から10月にかけての6週間、第5波の「緊急事態宣言」時には登校をひかえ、オンライン授業とした(はじめの4週間は全員がオンライン、つづく2週間は半数が登校、半数が家庭のハイブリッド式)。9月1日始業式の朝、白い門は閉じたまま、子どもたちの元気な声が校舎にひびくことはなかった。

だが、この期間のオンライン授業は、1年半前の「オンライン授業」とは明らかに質がことなっていた。朝、子どもたちが学年・学級ごとに一斉にZoomに入室、朝の会で出席をとり、配信される全校礼拝をまもり、40分×4コマ(1年生は3コマ)の学習にとりくんだ。〈教室で目の前に子どもたちがいるように展開されるZoomによる同時・一斉・双方向のオンライン授業。音楽や体育、造形、家庭科など実技系の教科でもおなじように授業ができました。授業者とそれをサポートする教員の連携、ご家庭のご協力がいあって可能となったものです。(さらっと書きましたが、準備と運営にあたる水面下の努力や労力は、機器などの環境整備もふくめて並たいていのものではありませんでした)〉——『からしだね』2022年1月、No.97

この間の教員のくふうと努力は、学年3人体制が機能したこともあり、学校を大きく変えたものだった。

2学期のオンライン授業の成功体験があったので、3学期の第6波に際しては全校ないし学年のオンライン授業実施の判断をためらわずに(とはいきれないが)くだすことができた。ちなみに、授業日数に計上されない臨時休業や学年閉鎖とはあえてよばず、登校をひかえてオンライン授業とする、と表現している。

3学期後半は黄金の3か月にくらべるとはるかに条件

は悪かったが、感染対策を徹底しつつ学校行事を実施した。学習発表会は舞台発表を録画するかたちで実施、5・6年生のTGG英語体験学習と6年生の国会見学もそれぞれバス3台で実施した。また、延期されていた「ほんの学校」読書会は礼拝堂と仕事場の岡山をZoomでつなぎ、あさのあつこさんにおはなしをうかがうことができた。

第6波は児童の感染報告が顕著に出はじめた時期であり、学校が感染経路とはならないよう、クラスターの発生にはとくに気をくばった。行事实施後の数日間は、体調不良や検査・受診の連絡を聞くたびに神経がすりへっていった。

そのほかこの年度の特記事項をいくつか。

施設建設プロジェクトは教室棟の学年教室3フロアの改修をおえ、体育館もきれいにできたので、こんどは2階から上階にむかって特別教室に手をつける計画をたて、この夏休みには造形室と1階にある児童の更衣室の改修工事を実施した。

募集広報活動はできるだけ多くの方に対面で参加していただきたいところ、感染状況に応じて人数を制限したり、ハイブリッドにしたり、校内をリモートでめぐったりして、ICT機器を活用したコロナ対応の優位性を前面にうちだしてさまざまなこころみにとりくんだ。夏にはLINE公式アカウントを開設、「友だち」登録してくださっている700人(2022年10月現在)の方に公式サイトへの更新情報を定期的に発信している。

秋におこなわれた2022年度入学選考では総志願者数が過去最高となり、1月の転入学試験による入学予定者も含めて2022年度当初の児童数は435名、2018年度に学則定員を回復してから5年つづけて学則定員を満たすことができている。

なお、2017年度入学者が本校史上はじめて女子が多くなってから女子が多い学年ができるようになり、2022年度スタート時にはこれまた本校史上はじめて男女比が逆転(女子219・男子217)することになった。

この2年で校務のデジタル化が一気にすすんだ。iPad ProとノートPC(どちらも2022年4月から新機種に更新)の両方をつかいわけてMicrosoft Teamsとクラウド



リモート授業(2022年2月)

を運用、出欠や事務処理など日常の連絡はチャットで、会議資料などはチームで共有するようになっていく。出席簿、通知表「私のはげみ」、指導要録と、おかれていた部分も、コロナを奇貨としてというべきか、デジタルで処理できるようになった。校務支援システムについても、2022年度中に決定するスケジュールでこの年度から検討をはじめている。

コロナ対策として、登校してくる児童を教員が教室で受け入れ、家庭での朝の検温を確認するなど健康チェックをしてから学習をはじめようとしている。当面の措置として昇降口の開扉を8時にしている（朝の自由あそびはなし）、教員の勤務開始時刻も10分前倒しして8時、うちあわせを夕方にして（現在は16時40分から）、終了後勤務解除としている。

2020年6月の一斉休校あけからはほぼ毎朝昇降口に立って登校する子どもたちをむかえ、できるだけ一人ひとりに声をかけてコミュニケーションをとるようにしている。これもコロナを奇貨として、というべきか。

この年度は翌2022年度＝創立70周年のプレ・イヤーにあたっている。今回の周年記念事業はもっと教職員のアイデアをいかした企画をたてて実現しようと、記念行事、記念グッズ、記念誌などを校務分掌の担当者にわりふり、1年かけて準備にとりかかるとした。

69周年の記念品としては例によってミニタオルとポストカードを制作。ミニタオルはティディベアが立ち上がって70周年にむかって歩き出すというデザインを採用した。65周年のときに好評だったオリジナルタータン“Children's Smiles”のマフラーを70周年記念として復刻することにして、おとな用のストールとあわせて販売の予約をとったところ、マフラー 223本（1本5,000円）、ストール110枚（1枚10,000円）の予約がはいった。

これらもろもろの教育活動の結果、学校評価のための保護者アンケートでは「キリスト教学校としての学校運営」「保護者と連携した教育活動、教育相談」で過去最高の評価をいただくなど、とりくんできた努力がむくわれ、大きな自信となった。「コロナ対応」が前年度よりも評価がさがったのは、対応がすこしずつ安全策側に寄っていると感じた家庭があったのではないかと分析している。

もうひとつ、テーマ募金4期「夢たまご」応援募金は2019～2021年度の3年間で135件、約1,330万円のご

芳志をいただくことができた。これから数年にわたり「ほんものの人・もの・コト」と出会うための各種プログラムの原資を確保することができ、感謝であった。

年間チャプレン：森島豊牧師（青山学院大学宗教主任・日本基督教団教務教師）

創立記念礼拝：水谷誠さん（43回生）

友を知る礼拝：比企敦子先生（日本キリスト教協議会教育部総主事）

読書会：あさのあつこさん

【2022年度】

〈創立70周年を迎える2022年度を、関東学院小学校の歴史をふりかえり、現在を見つめ、前進させる節目の1年と位置づけます。新型コロナウイルス感染拡大防止対策のために限られた条件のなかで実施してきた過去2年の諸事業についても見直して2022年度の事業計画に取り込み、いまできる教育活動を創意工夫し、未来ビジョンの各プロジェクトおよび中期計画とも連動させて着実な実行を図ります。〉——「2022年度事業計画についての展望」

2月にピークをむかえた第6波がおちついてきた4月、創立70周年の1年がはじまった。コロナ第7波は7月から8月にかけてピークとなったが、9月末には感染状況が落ち着いた状態になっている。1学期と2学期（の前半）は感染の波が低いところにあり、“3年ぶり”に実施できた教育活動・行事が多かった。年度前半の“3年ぶり”を列挙する。

春の遠足は2～6年生はバス遠足とし、1年生と6年生がいっしょに行く野毛山遠足が3年ぶりに復活した。

「みどりの学校」は1年生と2年生は日帰りに、3年生と4年生は1泊に変更して、5・6年生については2泊のままで、6～7月に実施（1年生は10月）した。定宿として利用してきた宿泊施設がコロナの2年間に軒並み廃業してしまっていて、代替の施設をさがすのに苦労した。食事の座席配置、宿泊室の人数やすごし方、現地で発熱者が出た場合の対応マニュアルなど、3年ぶりの宿泊行事を実施するために感染対策にたいへん神経をつかった。ぶじに帰校したあとも体調不良の子が出ていないか、気がやすまらない日が数日つづくことになる。利用した施設はつぎのとおり。

- ・1年生 足柄ふれあいの村
- ・2年生 東山荘（御殿場）
- ・3年生 上郷森の家

- ・4年生 ホテル光風閣くわるび(西湖)
- ・5年生 富士山YMCAグローバル・エコ・ヴィレッジ(朝霧高原)
- ・6年生 清泉寮(清里)

ちなみに、廃業したのは恵みシャレー(軽井沢)、天城山荘(伊豆)、レイクホテル西湖、城ヶ島京急ホテル(三浦)で、キリスト教関連団体が運営する長い歴史を持つ2施設がなくなったのは痛手だった。

横浜武道館を会場とする「春のなかよし会」は昨秋につづき保護者1名参観の午前日程で実施、各学年2種目(リレーと学年種目)をたのしんだ。秋は保護者の参観枠を2名に広げ、種目もひとつふやして表現運動にも挑戦した。5・6年生による「秋の花」が3年ぶりに大輪の花を咲かせ、大きな拍手につつまれた。武道館のアリーナで全力を出し切れるように、学校指定の外ばきとはべつに、運動に適したシューズの着用を春のなかよし会から認めることにして、体育やぶどうの木子供会(クラブ活動)の時間も含めて色とりどりの靴をはいた子どもたちが躍動している。体育では水泳学習もじゅうぶんな感染対策を講じたうえで3年ぶりに再開した。

英語教育のオプションとして2016年度に始めたイングリッシュ・キャンプは、2020年度は五輪狂騒曲を避けて中止(結果的にコロナとも重なった)、2021年度も中止していた。ホテルに宿泊してデルタ航空の外国人クルーと交流する、成田空港の出発ロビーで外国人旅行者に突撃インタビューするという本校の独自プログラムはまだできないが、かわりになるものとして夏休みに学校を会場に通いで2日間のプログラムを計画、3年ぶりに実施した。ネイティブスピーカーの講師をホテル実施のときの倍の人数手配でき(2日めには各国から来日している外国人留学生も多数くわわって)、密度の濃いイングリッシュ・キャンプとなった。

神奈川県私立小学校協会の音楽会、陸上記録会も3年ぶりに実施され、ブラスバンドの子どもたち、陸上クラブの子どもたちが参加することができた。発表の場がもてなかった6年生にとっては入部3年目の初舞台となり、照明にステージベストが映えていた。

オリブ祭も10月29日に3年ぶりに対面で実施。会食なし、児童のみ2学年ずつ3部制など変則的な日程だったが、子どもたちの歓声と笑顔がもどってきた。運営する役員・委員・ボランティアにも笑顔があふれていたのがなによりだった。

さいごに、前年度から検討をはじめて計画をたて、年間をつうじておこなっている創立70周年の記念事業について記録しておく。

10月7日に創立記念礼拝をささげた。この時点の感染状況を鑑みて来賓は招かず校内のみの実施とし、礼拝堂に3・4年生、ほかの学年はYouTubeで配信される映像を見ながら教室で礼拝をとにした。礼拝には卒業生で牧師をなさっておられる中村朝美氏をおまねきし、つづいておこなわれた記念の会には旧教員の八木沢薫先生にご登壇いただいた。こちらは低学年と高学年に分けた二部制で、礼拝堂に3学年が顔をそろえたのはひさしぶりのことだった。YouTubeはご家庭とたんぼの会の役員にも同時配信して参加していただいた。

施設建設プロジェクトとして年次計画に沿って進行している教室棟特別教室の改修は、3階ライブラリーに手をつけた。「ほんの学校」を特色とする本校の読書活動の拠点となる施設であり、予算をかけて内装や照明を一新、書架もすべて入れ替えて9月16日に開館した。「うわー、図書館みたい」という子どもの感想が新しいライブラリーへの期待を物語っている。

長年つかわれてきたランドセルと体操服を70周年を期にモデルチェンジした。ランドセルはリュックタイプにして紺と濃茶の2色を、体操服(半袖)は白と緑の2色を、それぞれオリジナルデザインでつくり、2色のどちらを(どちらも)選んでもよいことにした。体操服にはオプションで紺の上着(長袖)も用意し、これも選択肢のひとつにくわえた。男女別と読める現行の服装規定にも「選ぶ」をコンセプトに手をいれて、ジェンダーレスに対応することになっている。

記念品は、4年つづけたミニタオルではなく本草ミニフォトフレームを1,000個つくり(もちろんこれもオリジナルの特注品)、お気に入りの写真を入れてくださいとプレゼントした。

オリブの会(保護者会)でも趣旨に賛同してくださり、馬車道十番館のビスカウトをオリジナル缶に入れ



70周年記念(2022年10月)

て販売するなど、70周年をともにしてくださっている。

子どもたちがいちばん反応したのが、65周年のときに誕生したテディベアの大きな友だち(子どもの等身大サイズ!)だった。記念礼拝のあと紹介する場面で、カバーをとって姿をあらわしたときには大きな歓声があがった。

年あけの2月27日にはみなとみらいホール大ホールで記念コンサートを予定している。「夢たまご」プログラムの企画として3年前にもおまねきしたバッハ・コレギウム・ジャパンと指揮者の鈴木優人氏によるコンサートを開催する。各クラス10時間の音楽の特別授業を組み、コンサートがよりのたしめるように学習を進めている。

5期の3年間で2022年度から始まったテーマ募金は「創立70周年記念事業募金」としてご芳志をつのっている。

〈伝統をたいせつにしつつ変革に挑戦する学校として、70年の歩みを振り返りさらなる発展の契機とすべく、「創立70周年記念事業」を計画いたしました。礼拝、コンサートなど記念行事の開催、オリジナリティあふれる記念誌や記念品の制作など、関東学院小学校ならではのさまざまな記念事業を70周年にあたる2022年度から数年かけて実施する予定です。〉——「募金目的」

初年度も半期ですでに多くのご寄付がよせられており、4期「夢たまご」応援募金とあわせて70周年から75周年(四分の三世紀!)にかけて特別な事業を毎年実施できる力強い、そして大きくひろがる夢の支えとなっている。

年間チャプレン：渡邊さゆり牧師(日本バプテスト同盟駒込平和教会)

創立記念礼拝：中村朝美牧師(8回生、日本福音ルーテル教会)

国際理解礼拝：佐々木和之さん・恵さん

友を知る礼拝：(予定)渡邊さゆり牧師(マイノリティー宣教センター共同主事として)

読書会：(予定)斎藤惇夫さん

【おわりに】

関東学院小学校創立60周年から70周年にかけての軌跡である。長文の記録となった。岡崎がひとりでやったような書き方をしているが、アイディアが企画になって実現できたのは、教頭、事務主任をはじめ教職員、法人のみなさん、オリブの会、たんぽぽの会、

三春台倶楽部のみなさんの直接間接のご協力・ご支援あつてのものである。異質なものを受け入れてくださる土壌があったからこそその十年だった。

「学校改革」と大きな旗をふってきたわけではない。ゆるやかな改善をすこしずつ積み重ねてきたつもりであるが、こうして十年のスパンでふりかえるとかなり大きな変化変革にはなっている。誤解をおそれずにいえば、無風だったところに微風を送りつづけた結果、いまがあるといえるのではない。

「伝統をたいせつにしつつ変革に挑戦する学校」という表現を多用している。あるときとつぜん大きな変革をぶちあげるのではなく、つねに動きつづけることがたいせつで、その意識が学校に定着してきたのはたしかである。「毎年イノベーション」(『未来ビジョン』プロジェクトNo.8)というスローガンが文字どおりのものになっている。

ただ、70年の歴史のなかでうけつがれ醸成されてきた風格、たたずまい、貫禄といったものが関東学院小学校にはそなわっている。モデルチェンジをかさねるけれど、どれを見てもそのメーカーのクルマだとわかる。そんな変わるけれど変わらないものはたいせつにしてきたつもりである。

人事や保護者のこと、オリブの会・たんぽぽの会・三春台倶楽部のこと、各校各園や法人理事会との関係、神私小・日私小連・県私学振興課・幼児教室との関係など、紙幅のつごうでふれなかったこと、さまざまな事情で書けなかったこともある。ご容赦いただきたい。たりないところは『からしだね』『WE CAN DO IT』『OLIVE SPIRIT』『オリブの若木』『たんぽぽの会会報』、また「事業計画」や「未来ビジョン」など各種の文書を参照されたい。校内にかかわる人名の記載は避けたことを付記しておく。

創立記念礼拝をおえた10月。いま、普門院を見下ろす校地南側の法面にはコバノランタナがさきほこっている。就任初年度の2012年に「校長裁量費がウン万円(7ケタ)あります」と言われて整備を思いつき、雑草がはびこるだけだった斜面に手を入れて、10年後には壁の下まで伸びていますよという園芸会社のことばに夢を託し、工事したものだ。

年に2度満開になり法面が濃いピンクにそまるときには“映えスポット”となり、立ち止まってカメラをむける人もいます。2本の十月桜も根を張り、秋と春に開花して目をたのしませてくれている。まいた種が十年かけてここまで大きくなった。

釜利谷(金沢文庫)キャンパス、お疲れさま！

関東学院大学名誉教授

入試・教育アドバイザー 御園 和夫

自然環境に恵まれたキャンパス

国際文化学部、社会学部の前身である「文学部」が六浦(金沢八景)キャンパスから釜利谷(金沢文庫)キャンパスに移ってきてから早30余年。釜利谷の地で誕生した両学部が、旧文学部発足の地である六浦のキャンパスに移転することになるとは想像していなかった人ものではなかろうか。今回は、結果的には、六浦にあるいくつかの学部、学科が2023年4月より開校する関内キャンパスに移動する過程での、いわば、玉突き移転という形になった。六浦に戻るといふ見地からは、歴史は繰り返す、と言ってもいいのかもしれない。

釜利谷キャンパス周辺には丘といふか山といふか、緑が多く残され、鎌倉方面に抜けられるハイキングコースもある。自然に囲まれたとてもどかな地域である。その山といふか丘を見やると、詩編の聖句を連想する。

「われ山に向かいて目をあぐ。我が助けいずこより来たるや。我が助け…」(詩編121)

(I WILL lift up mine eyes unto the hills, from whence cometh my help. My help cometh from …, Holy Bible King James Version Psalm 121)

開校当時、キャンパス正門から奥の野球場のほうに向かって伸びるコンコースの両側に沿って植えられた小さな桜の木も、今ではすっかり大きくなり、春にはみごとな花を咲かせる。咲き始めよし、満開の時よし、また、散りだしての桜吹雪よし。新入生を歓待するかのようである。

文学部の釜利谷移転

もともと釜利谷キャンパスは全学1、2年生の一般教育課程のキャンパスとして1986(昭和61)年に開校した。教室棟の2階だったか3階だったかの大教室の前のほうに、何かの教科で実験にでも使う目的だったのか、水道のついた大きなシンクがあった。これも全学の一般教育用のキャンパスの教室だからかな、くらいに思っていた。それもいつの間にか取り払われたが。

旧文学部が釜利谷に移転する少し前に教授会で、ここ(六浦)から遠くないところに一般教育課程用のキャンパスを作る計画があることが学部長(板倉敏之先生、ドイツ語担当)から明らかにされた。初めて聞かされた時には「釜利谷」という具体的な地名は示されなかった。本キャンパスから30分くらいのところというような説明を聞いた覚えがある。ただ、私はたまたまその時にはすでに釜利谷地区に住んでいたもので、大学外からの情報で、この場所に来るんだな、ということは知っていた。自宅が近かったので、通勤には便利だった。徒歩で17、8分、車で5分程度であった。車であれば、やはり近隣住民のO先生がいる。この先生は車庫入れの名人で、ご自宅の小さな駐車スペースぎりぎりに駐車できる。車の前後十数センチかと思わ



せるすご技。この腕前には本職の車屋さんもびっくりだったとか？

1968(昭和43)年に六浦キャンパスに創設された文学部(英米文学科と社会学科の2学科)が釜利谷キャンパスに移ったのが1990(平成2)年だったと思う。以降、釜利谷キャンパスは体育施設などを除いて、文学部専用となった。六浦から釜利谷への引っ越しに際し、任に当たられた学部長は英米の川村和夫先生だった。本格派の英文学者だった。庶務課長は仕事のできる吉村昌久さん。吉村課長の机の上はいつもきちんと整頓されていたのを覚えている。特に、帰られた後は机上には物は一切置かれていなかったのが印象的だった。ちょうど私はこの時期は外留をしており、引っ越しの様子、大変さは経験していない。引っ越しに当たっては、近隣への挨拶なども含め、かなりの労力を要したはずである。

ところで、なぜ文学部が釜利谷へ移転してきたかについては、当時の大学上層部の判断であるが、文学部の規模が、学生数と教室などの関係を含め、ちょうどいいからということが大きな要因として挙げられたかと思う。六浦の本キャンパスが込み合ってきたという事情もあったのだろう。もちろん、文学部としても反対はなかった。特に、社会学科のほうが移転に積極的だった。

釜利谷での文学部内の流れ

釜利谷キャンパスに移って来てから、「大綱化」(1991(平成3)年に施行された大学設置基準の大幅な改正)という全国的な波が押し寄せ、文学部でもいろいろ議論がなされた。特に、一般教育科目担当の教員と、英米・社会の両学科の教員との間で活発な論争があった。その当時は、他方で文学部に大学院を作るという、こちらも時代の要請で、大仕事が重なった。なんとなく学部内がざくざくした雰囲気だった。当時学部長職にあった私はこの両方をどのように進めたらよいかで、幾人かの先生の応援を仰いだ。特に、教務主任だった社会学科の浦野和彦先生のサポートは大きかった。とても有能で緻密な思考を持った浦野先生には大いに助

けられた。結果的には、それまでの一般教育科目が教養科目という形に変わり、学生の履修方法にもいい方向に影響を与えたと思う。大学院のほうも順調に進み、平成5年の4月に開校となった。

これ以降、これまで長い間文学部内部で懸案だった新学科を作るという機運が高まってきた。1968(昭和43)年に開設された文学部であるが、当時の学長・相川高秋先生(英文学専攻)が文部省に提出した文書に、「当面、英米文学科と社会学科の2学科で申請する」といったような内容の記述がある。このことは大学院設置がらみで教授会でも披露したのを覚えている。つまり、発足当初から新学科構想はあったのである。この2学科での発足は、端的に言えば、英米文学と社会学(社会福祉学を含む)の分野で中心的役割を果たせる先生がいたからである。(『おのれを低くする者 柳生直行講話集』学校法人関東学院 pp.211-215参照)

英米と社会の2学科をつなぐような学科を創設する話が出るたびに問題になったのは、新学科の中身をどうするかであった。我も我もその中心に入りたいとなると、中心となる柱が立たない。歴史学科、日本文学科などいくつかの案が現れては消えの流れがありつつも、教養科目担当の先生方を中心に、短大改組で優秀な先生方が文学部に来られたのを機に、「比較文化学科」として、釜利谷に移って初めて新学科が実現した次第である(2002年)。首尾よく3学科になって、どの先生も専門ゼミを担当し、落ち着いて、平穩のうちに研究・教育ができるようになった。文学部内部の雰囲気もかなりよくなった感じがした。

昼休みの礼拝



釜利谷校舎でも礼拝が持たれたが、礼拝堂がなかったので教室棟3階の会議室で毎週火曜の昼休みに短く行っていた。学生対象であったが、時折教員も出席していた。個人的には当時から思っていたことだが、ミッションスクールで礼拝をせわしい昼休みに済ませてしまうのは物足りない感じがしていた。学生も昼休みは多忙である。なかなか礼拝には出席しにくい。某ミッションスクールの大学では、週一度の礼拝のある日は、礼拝用の時間を昼休みに続けてプラス1時間程度とし、その曜日は時間割全体が他の曜日とは異なっている。この話を関係者にしたような気がするが、どうだったか。いずれにしても、学院を支える礼拝に学生がゆとりをもって出席できる機会は広く設けておきたいものである。

釜利谷キャンパスの諸施設から—ラグビー、駅伝など



釜利谷キャンパスの運動施設はなかなか立派である。野球場、陸上競技場、ラグビー場、などなど。周りは緑に囲まれている。このすばらしい環境での施設のおかげか、ラグビー部は大学ラグビー選手権に1998年から2007年まで連続10回決勝進出、そのうち6回の全国優勝を果たし大学日本一になっている。また、陸上競技部は1994年以降2004年までに箱根駅伝に6回出場した。これらの偉業は関東学院大学の知名度を全国区にする大きな役割を果たしてくれたのでは、と評価する人も少なくなかった。私もラグビーの応援では国立競技場によく足を運んだ。応援に駆け付けた学生達

も本学の好機になると「かんとう！、かんとう！」と一丸となって大声援を送っていた。学院からも内藤幸穂理事長、星野彰男理事などは試合場では常連だった。ラグビーも箱根駅伝も是非復活してほしいものである。

釜利谷の購買部、食堂の存在も忘れられない。学生、教職員がよく利用し、くつろいでいた。私も便利に利用させていただいた。いつの頃からか、昼のランチにはいつも決まったものを注文した。あれこれ考える手間も省け、味も好みだった。何を注文したのか、ですと？それは…内緒。開学サービス釜利谷担当の兼頭さんには特にお世話になった。

コロナの影響

コロナの影響にも触れざるを得ない。オンライン授業という体験したことのない方式での授業は先生方も当初は戸惑ったことだろう。某学部のある年配の非常勤講師で、メカに極めて弱い、というか、機械の嫌いな先生は、非常勤を辞退したといううわさも流れたほどだった。そんなことはできません、ということだろうか。教員ばかりでなく、学生もオンライン形式に慣れるまではさぞまごついたことと思う。オンライン形式にもメリットはあろうが、今は多くが従来の対面授業に戻ってきており、学生もキャンパスにだいぶ出てきているように見える。ところで、オンライン授業での教育成果はどうだったのかの検証結果を目にしたいものである。

釜利谷キャンパスに通う学生はスクールバスを利用する。曜日と時間帯によっては文庫駅の階段あたりから学生の長蛇の列を目にすることがある。バス内で「密」にならないかなと心配したこともある。大学側もそれなりの対策はしていることとは思うが。いずれにしても、引越しによって、この心配はなくなる。学生にとってはメリットである。

釜利谷キャンパスに感謝

釜利谷キャンパスでの生活は概して快適だった。ただ、全学の会議などでは、釜利谷から六浦への移動に

時間を取られ、それがやや面倒だった。釜利谷キャンパスへ車で通う教職員も多かったが、ほぼ十分な駐車スペースがあり、この点はありがたかった。

最後になってしまったが、職員の方々にも大変にお世話になった。上で言及した方々以外では、今となつては名前を出てこない人も多いが、例えば、私の学部長時代の庶務課長だった高嶋八郎さん。この方は特殊能力を持っている。人の心を読み取れる。先生方にもすこぶる評判がよかった。高嶋氏のおかげで当時の私のワープロの腕が格段に上がった？ 他に、小川昌幸さん、栗飯原覚さん、関口洋子さん、大澤麻衣子さん、図書館釜利谷分室時代の藤井久雄さん、分館の杉山友美さん、などには研究・教育上ご協力をいただいたことには大いに感謝したい。他の先生方も同じような思いであろう。おっと、LL（語学演習室）の楠元仁子さん、徳山真奈美さん、川村恭子さんも忘れてはならない。釜利谷キャンパスを支えてくれた方々である。

更なる発展を

以上、求められたテーマ「変わりゆくキャンパス：釜利谷（金沢文庫）キャンパス」に沿って思いつくままに書いてみた。が、なにせ昔のことを中心に述べたので、記憶違いの部分もあろう。そのあたりはご容赦を。唯一記憶がはっきりしているのは、釜利谷キャンパスには大変にお世話になりました、お疲れさま、ということだろう。すばらしい卒業生もたくさん巣立って行ったし。感謝あるのみ。

今は先の予測のつきにくい時代であるが、六浦に移転し、更なる発展を期待する次第である。もっとも、これからは「更なる発展」は当事者の山をも動かすほどの「大いなる努力」が前提であろうが。これからも「人になれ 奉仕せよ」で。

御園和夫先生は2022(令和4)年12月に急逝されました。本稿は先生が直前まで校正されていた遺稿になります。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

学院史資料室事務室

金沢文庫(釜利谷)キャンパス随想

― 桜並木、オリーブ、ネジバナ ―

関東学院大学名誉教授 大越 公平

1 室の木から釜利谷へ

金沢文庫キャンパス(釜利谷キャンパス)は、全学の一般教育の修学地として整備されました。のちに文学部、さらに国際文化学部と社会学部の学部・大学院の教育研究の場としての重要な役目を果たしてきましたが、いよいよ2023年3月がその「卒業」の時となりますとのご連絡をいただきました。正直に申し上げれば、寂しい限りです。でも、金沢文庫キャンパスは新たな時への出発の日を迎えます。さらなる発展を願います。

人生におけるかけがえのない時をこのキャンパスで過ごされた方々、お一人おひとりが、さまざまな思いを巡らしておられることでしょう。かつて教員であった一人としての私の思い出もその一つに加えていただければ幸いです。

私は、室の木キャンパス(女子短大)から金沢文庫キャンパス(文学部のちに国際文化学部)に異動しました。室の木キャンパスでともに学んだ女子短大生が親御さんになられ、そのお子さんが比較文化学科の学生として入学し、ともに金沢文庫キャンパスで学び、研究するということもあり。私が定年を迎えたのは、2019年3月です。記念としてわが家の庭にもオリーブの苗木を植えました。

キャンパスの始まりは、1986(昭和61)年に1・2年生用キャンパスとして開校され、名称は、釜利谷キャンパスでした。私も「釜利谷キャンパス」という名称に愛着をもっています。1988(昭和63)年の春、私はあの長い坂を自転車で登り、校舎の手前の駐車場・駐輪場(現在は図書館)に自転車を置き、校舎に向かいました。当時、私は女子短大の専任講師であり、このキャンパスでは経済学部の教養科目「文化人類学」を担当していました。現在も変わらない2階の大教室で講義を担当

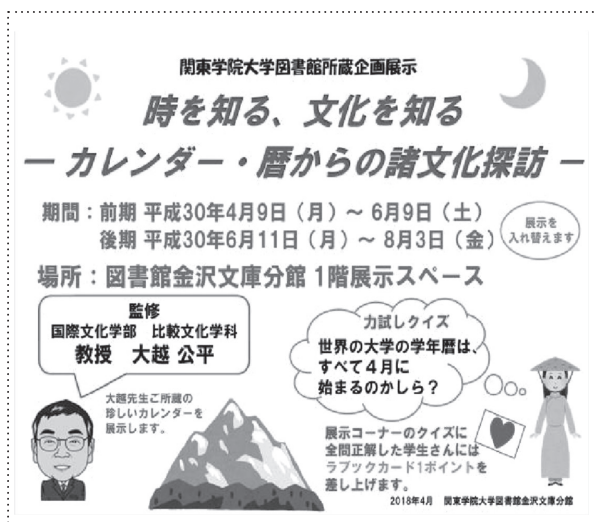
した後に、控室に戻り、あの坂を自転車で下りました。ときには、図書室(図書館完成後は教室、研究室、人文科学研究所室、会議室等々として活用)に寄り、本を眺め、この図書館分室のみの蔵書であったお気に入りの本(田淵行男『山の紋章 雪形』学習研究社1981)を読み、時には借り出して、帰路につくこともありました。

雪形(ゆきがた)とは、辞書によれば、「山腹の雪の消え具合によってできる形」とあり、雪占(ゆきうら)とは、「山や野に消え残る雪の形によって、農作業の時期を測り、また、その年の豊凶を占うこと。山の名は雪占に因んだものがある。』(『広辞苑』第7版 2018)とあります。確かに辞書の説明の通りです。でも、誰もがその形を見てすぐに分かるというものではありません。そのような伝承があり、それを期待して暮らしている人びとに見えてくるものであること、すなわち「民俗伝承があればこそ雪形である」ことを長年のフィールドワークを経て学ぶことができました。毎年春に山には登ることなく(登れなくなりましたが)、東日本の雪山の見える諸村落を歩くことが楽しみでした。いまでもフィールドワークに出かけています。

雪形は自然暦の一つであり、素朴な暦の一つです。在職中は諸文化の暦、カレンダーを集めて、一つの研究の対象としていました。暦の天文学的研究、いわゆる暦学ではなく、暦、カレンダーに依拠して創り出される諸文化の事象を文化人類学の観点から分析する研究です。

2018年の春には図書館からお誘いがあり、研究テーマに関連した図書館の蔵書と私がフィールドワークで集めた資料の展示企画がありました。長野県JA大北から贈っていただいたユニークなカレンダーも展示し

てもらいました。北アルプスの雪形を詳細に紹介したカレンダーです。これもよい思い出の一つです。



企画展示の案内(関東学院大学図書館金沢文庫分館 2018)

新入生が入学後すぐに目にする暦は、学年暦でしょう。日本での学年暦と諸文化での学年暦の違いも話題にしました。「力試しクイズ 世界の大学の学年暦は、すべて4月に始まるのかしら？」とポスターにも書き込んでもらい、世界の各国での学年暦は4月に始まる例はむしろ珍しいことを知ってもらいました。諸外国への留学を考える場合は、とくに重要な問題です。さらに、諸社会(国)・諸文化における「ものの始めと終わり」についての認識を比較して研究することが、比較文化研究の基本的なテーマであることを理解してもらうために、この展示を企画しました。以前は卓上型の学年暦カレンダーもありました。ご存知の方も多いと思います。今では貴重なものです。その学年暦もすこしずつ変わっていき、日本でも10月入学の学年暦がメインとなる時代もやってくるのでしょうか。一枚の紙、冊子のカレンダーではなく、スマホの中のカレンダーで十分という時代がやってくるのでしょうか。

2 文庫(釜利谷)キャンパス風景

(1) 学年暦を彩る桜並木

学院の各キャンパスは、人と自然の調和を考えるためには最適なキャンパスです。室の木キャンパス(女子短大)に勤務していたころは、平潟の磯や野島を散歩コースにしていましたし、2002年に文学部比較文化学科が創設され、私も着任し、この武蔵野と相模の堺の自然豊かな釜利谷の里山を歩くこともキャンパスラ

イフの一つでした。そのころは、キャンパス創設から15年ほどが経過し、キャンパスとしても整備され、植樹された桜も大きく育ったころだったのでしょうか。桜の並木は、卒業、入学の時を彩り、しばらくしてスクールバスが桜並木を行き交うようになり、スクールバスはこのキャンパスになくってはならないものの一つとなりました。



守衛さんと朝の挨拶を交わし、コゲラやリスがやってきたかどうか、カルガモがキャンパスを通り、遊水池に移動したかどうかを教えてくださいました。「グラウンドの先に鳥の営巣地があり、カルガモが遊水池に向かってグラウンドを横切っていくようです」とは守衛さんのコメントでした。一度はその様子を見たいと思いながら、果たせませんでした。残念です。春と秋の二度花を咲かせる桜も、夏椿、アジサイも咲きました。夏の芝生、冬の雪景色、四季折々の自然との調和が感じられる時に恵まれました。

比較文化学科が発足し、教員一人ひとりが、フレッシュな気持ちで執筆した『比較文化をいかに学ぶか?』という学科のガイドブックがあります。学科に関心をもってもらう一つの参考書としての新入生に配布しました。私もその一章に次のように書きました。

文化について、さまざまな関心もち、さまざまな「なぜ?」をもち、比較文化学科へ入学してほしい。春の桜や山桜、山から芝生のグラウンドを通っておりて来る緑の風、校門から一直線に続く並木が赤や黄に色づく秋、イルミネーションの素晴らしいクリスマス風景等が織りなす釜利谷キャンパスの季節を感じながら着実に進めていく四年間の考察は必ず実りあるものになるはずである。(キーワードとしての「民俗」『比較文化を

いかに学ぶか?』明石書店42-43頁2004)

その実りの一つが、中庭での集いでした。木々が紅葉する所に卒業生に向けたホームカミングデーがありました。社会人となった卒業生の笑顔に出会いました。12月を迎える前のエントランスホールは、クリスマスツリーの点灯式で賑わいました。

(2) 講義のタイトルページにキャンパス風景を

視聴覚機器の設備が格段によくなり、ほとんどの教室でパワーポイントによる講義が可能になりました。フィールドワークで撮った新鮮な画像も入れて講義ができるようになりました。沖縄から、中国から、東南アジアから帰ったときは、講義ノートにあの画像もこの画像もいれようと意気込み、講義時間内には収録しきれないこともありました。

「文化人類学」第一回目の講義のタイトルページには、色々な角度からものを見てほしいという思いを込めて、通学路からの風景とは違うグラウンドのスタンドから見える校舎を載せました。



私が担当した「文化人類学」、「民俗学」の講義のタイトルページには、その季節のキャンパス風景を入れ、新暦と旧暦の日付、二十四節気も書き入れました。今でもこの画像を見ますと、研究室から教室へ向かっていった自分を思い出します。

(3) オリーブをキャンパスに

オリーブは、本学のキャンパスにはあってほしい樹木です。でも、このキャンパスの当初には植樹されていなかったようです。当初はこの土地に馴染まなかったのでしょうか。2004年には、植樹のために教職員の募金活動が行われ、葉山町からの寄贈もあり、最初の

植樹が行われました。その後も植樹が行われ、校舎の脇に、グラウンドの脇に、そして図書館の周囲に。登校の際には、春に花が咲き、秋に実が成熟する様子を観察して校舎に入ります。いまでは大きな実が。キャンパスになくてはならない樹となりました。



(4) ネジバナの形に魅せられて

私の学生時代には、「発展」とか「進歩」という言葉が重宝されていましたが、近年は特別目新しい言葉として使われることはないようです。それに代わったかのように「進化」という言葉が多く使われています。この言葉も目新しいものではありませんが、生物科学、人類科学の専門用語ではなく、最近、マスコミを通して多用され、日常会話でも頻繁に使われる言葉となり、本学のホームページにも「進化」の言葉が使われています。「2023年、関東学院は進化する」というタイトルで、関内に新しいキャンパスができることのお知らせがあります。「進歩」ではありません。大きな文字の「Evolution」が目飛び込んできます。

「進化」という言葉は、時代を越えて多くの人びとが注目する魅力的な言葉のようです。漠然としていますすが、人間にとって、あるいは生物にとって普遍的な価値を示すものと理解している人が多いことも事実でしょう。

文化人類学では、19世紀の学説として文化の進化は一系進化か多系進化かの議論が繰り返されてきました。一系進化の考えに対しては、「文化はすべて同じように進化するのか?」という疑問が投げかけられ、多系進化の考えに対しては、「文化進化の基本的な特徴は何か?」という疑問が投げかけられ、この議論は決着をみることなく続いています。

キャンパスを散歩しながら、進化のモデルには、ネジバナのような形、螺旋の形も取り入れて考えることも必要ではないかと毎年のように思い続けてきました。基本的にはある一方向へ進みますが、その過程では二つの方向、あるいは複数の、多様な方向に進むこともある形のモデル。もちろん具体的な諸事例に基づく考察ではありません。単なる思いつきに過ぎないのですが。



人文科学、社会科学がテーマであるとしても、「自然の姿をモデルとして考える」ことも一つでしょう。こうした思索？ができることもキャンパスを散歩する楽しみの一つでした。だが、2018年の夏は、どこを探

してもネジバナが見つけれませんでした。絶えてしまったのでしょうか。これからも咲いてくれるのでしょうか。

ここまで述べてきて、やはり気になるのは「進化」という言葉と関東学院の将来です。関東学院にとって「進化」とは、希望を与える言葉であることを願っています。果たしてどのような進化の成果が見られるのでしょうか。楽しみです。

3 オリーブの実るキャンパスをいつまでも

キャンパスは、これからも時代の変化とともにさまざまな変革を経て一步一步着実に「進化」していくことでしょう。『関東学院学報』によりますと

「キャンパス機能再編により、まもなく修学地としての役目を終え、2023年度以降は主にスポーツの拠点として活用されていきます。」(『関東学院学報』62 表紙 2022)とあります。

これからも多くの人びとの人生におけるかけがえない「時」をサポートするキャンパスであり、希望溢れるキャンパスでありますように。また、新たな修学地で研鑽を積まれる国際文化学部と社会学部の皆さん、お一人おひとりのご活躍を願っています。

お世話になりました。オリーブの実るキャンパスをいつまでも。

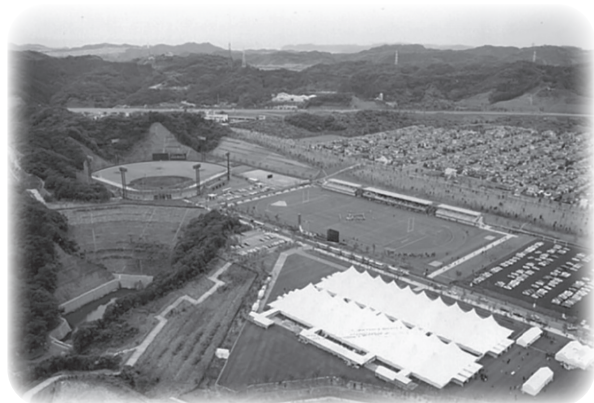
*参考文献

- ・学校法人関東学院 学院史資料室事務局「釜利谷(金沢文庫)キャンパスに思いをめぐらせる」展示資料 (2022(令和4)年7月～10月金沢八景キャンパス、2022(令和4)年10月～2023(令和5)年1月金沢文庫キャンパス)
- ・学校法人関東学院『関東学院百年史』1984(昭和59)年10月
- ・学校法人関東学院『関東学院学報 オリーブ・スピリッツ』No.62、2022(令和4)年9月
- ・関東学院大学『関東学院大学のあゆみ』2021(令和3)年3月
- ・関東学院大学図書館『図書館報』no.17、2002(平成14)年10月
- ・関東学院大学人文科学会『紀要』第139号、2018(平成30)年12月
- ・関東学院大学人文科学研究所『所報』第42号、2019(平成31)年2月
- ・関東学院大学文学部30周年記念事業実行委員会『関東学院大学 文学部の30年』1999(平成11)年3月
- ・関東学院大学国際文化学部比較文化学科(文学部比較文化学科)『比較文化をいかに学ぶか?』2004(平成16)年3月
- ・関東学院大学国際文化学部比較文化学科(文学部比較文化学科)『比較文化学科通信』Vol.28、2018(平成30)年11月、Vol.29、2019(平成31)年4月
- ・関東学院大学国際文化学部比較文化学科(文学部比較文化学科)『KGU比較文化論集』第10号、2019(令和1)年11月
- ・関東学院女子短期大学香葉会『香葉とともに』2022(令和4)年10月

写真で振り返るキャンパス その1：金沢文庫(釜利谷)キャンパス

今号で特集2としました金沢文庫キャンパスは、1986(昭和61)年に、当時の大学第1部1・2年生の一般教育科目のキャンパスとして開校しました。その後、1990(平成2)年に文学部(1～4年次生)が移転、経済学部および工学部は全員六浦(現金沢八景)キャンパスでの授業となりました。

2023(令和5)年4月、国際文化学部および社会学部の修学地が金沢八景キャンパスに変更されるこのキャンパスを写真で振り返ります。



関東学院創立100周年記念式典・祝賀会
(1984(昭和59)年10月6日)



2011(平成23)年4月に開通したスクールバスと桜並木



1987(昭和62)年から1989(平成1)年までの入学式は釜利谷
キャンパス体育館で行われた(写真は1988(昭和63)年)



創立100周年記念モニュメント



図書館献堂式当日(2002(平成14)年7月5日)



金沢文庫キャンパスの特徴でもある中庭
(2017(平成29)年6月撮影)

写真で振り返るキャンパス その2：KGU関内メディアセンター

横浜メディア・ビジネスセンター(横浜市中区)8階にあったKGU関内メディアセンターが2022(令和4)年10月1日に廃止されました。主に法科大学院や大学院の授業、生涯学習講座等で利用され、会議や研修の場としても多目的に利用されてきました。開放的なラウンジからは本年度に入り、2023(令和5)年4月に関内駅側に開校する建築中の横浜・関内キャンパスを望むことができるようになり、時代の移り変わりを実感できる場所でもありました。



横浜メディア・ビジネスセンター全景



入口からラウンジ、教室方面



授業、会議や研修等で使われたM-803教室



開放的で眺めが良いラウンジ



大学院等で使われたM-806教室

「学院史資料室事務室ミニ資料展」の開催について

学院史資料室事務室 室長 田中 宏治

学院史資料室事務室では2018年度まで、「資料展」という名称での展示を金沢八景キャンパス内や金沢図書館（横浜市金沢区）等で開催していました。

2021年度からは、「学院史資料室事務室ミニ資料展」（以下、ミニ資料展）として資料展を復活させ、2022年度も引き続き開催を行っています。

ミニ資料展の主なコンセプトは、学生および教職員に対して学院史を啓発することです。また、当部署の職員にとっては、学院史及び展示の方法や史資料の取扱いについて学ぶことができ、スキルアップができるというメリットがあります。



開催にあたり、どなたでも興味を持つような内容、史資料について分かりやすく説明するキャプション、そして足が運びやすいよう厳選した展示数にする等の工夫をしました。

2021年度は年間

全6回、1回の展示期間は約1ヶ月間でした。

2021年度に開催した全6回のテーマは次の通りです。

- ・第1回「あまり見たことがない坂田祐、蔵出し写真展」
- ・第2回「懐かしい！あの頃金沢八景キャンパス写真展」
- ・第3回「戦争と関東学院」
- ・第4回「坂田祐に送られた手紙」（同時開催「学院の封筒の歴史」）
- ・第5回「関東大震災と関東学院の復興」
- ・第6回「チャールズ・B・テンネー展」

2022年度は1回の展示期間を延ばして全2回の展示とし、次のテーマで開催をしました。

- ・第1回「金沢文庫（釜利谷）キャンパスに思いをめぐらせる」
- ・第2回「クリスマスと関東学院」

第1回展示は、2023年4月、大学の国際文化学部および社会学部の修学地が金沢文庫キャンパスから金沢八景キャンパスへ変更することに伴い、金沢文庫キャンパスの変遷を史資料や写真で振り返る展示を行いました。2022年7月から金沢八景キャンパスで展示を開始し、10月後半からは展示場所を金沢文庫キャンパス内に移し、10月29日（土）に同キャンパスで開催されたホームカミングデーの多数の来場者にも見てもらうことができました。



第1回展示の様子（2022年10月29日 金沢文庫キャンパス）

本展示については、両学部からの協賛、本大学名誉教授の大越公平先生、法人事務局施設課や学部庶務課（金沢文庫キャンパス）から写真のご提供をいただきました。

第2回は12月12日（月）から「クリスマスと関東学院」をテーマとし開催、クリスマスカード、過去に行われた関東学院クリスマスや毎年恒例となっているイルミネーションの記録写真の展示を行いました。また当該カードの発行年に対応した世間の出来事等を表示し、その時代が分かりやすくなるよう工夫を行いました。以前より当部署で保管している、カラフルで多種多様なカードを一堂に集めて展示したのは初めてではないかと思われます。



第2回展示の様子（2022年12月～）

この2年間、ミニ資料展を開催したことで、少なからず学生や教職員に対して啓発を行うことができたと考えています。学院創立150周年に向け、学院の歴史を更に啓発すべく、引き続き資料展を開催してまいります。

中学関東学院における「福音的キリスト教」の一断面

— 内村鑑三・高倉徳太郎 等をめぐって — (二)

関東学院 学院長付(学院史資料担当) 渡邊 茂

植村正久と高倉徳太郎とを繋ぐ「キリスト論」

前号拙稿「(一)」(『学院史資料室ニューズ・レター』第25号、2022年3月、14頁)において確認しましたように、高倉徳太郎は1926(大正15)年3月7日(日)《午後横濱中學関東學院の卒業禮拜に於て説教。》(前掲『高倉全集』第10巻、「高倉徳太郎年譜」、17頁)、因みにその週の半ば3月10日(水)には、高倉徳太郎自身の所属する「日本基督教会」(近代日本プロテスタント諸派中における代表的な改革長老教会)牧師として《夜、横濱海岸教會にて説教。》(同上、17頁)。

なお1925(大正14)年1月には、植村正久の死去により(その後継者として)高倉徳太郎が「東京神学社神学校校長」に就任していました。

植村正久については今日なお、古典的論文である京極純一著「日本プロテスタンティズムにおける政治思想—植村正久の場合—」(丸山真男・福田歓一編『南原繁先生古稀記念論文集・政治思想における西欧と日本』下巻、東京大学出版会、1961年)も参照されるべきと存じます。

また「東京神学大学々長」の桑田秀延著「内村鑑三と植村正久」(前掲、教文館編『現代に生きる内村鑑三』)では、「両雄ならび立たず」(同上、88頁)ともいわれ得る二人への穏健な批評が記されています。

(かつて「関東学院六浦中高 設立30年」に際しては、当時の石田昭義校長〔後に関東学院 学院長も兼任〕による論考「明治期のキリスト教と文学—内村鑑三・植村正久の文学観—」(『六浦論叢』第20号〈三十周年記念特集〉、関東学院六浦中学校・高等学校、1983年10月)も掲載されました〔同第20号には拙稿「日清・日露両戦役をめぐる植村正久—その戦争理解を中心として—」も掲載〕。『六浦論叢』第19号〔1983年2月〕には当時同校の宗教主任である大井人著「基督論論争—海老名・植村における—」、『六浦論叢』第28号〔1992年2月〕には国津師郎著「高倉徳太郎の歩み—『福音的キリスト教』の紹介—」や拙稿「日本キリスト教神学思想史へのエッセイ—熊野義孝・高倉徳太郎・植村正久をめぐる—」も掲載。なお、国津師郎教諭は後に、関東学院教会〔日本バプテスト同盟〕において当時の松田和憲牧師〔関東学院 現学院長〕と共に、教会員として執事〔教会役員〕も務められました。

いわゆる「高倉神学」への批判的論考としては、同じく植村正久門下の組織神学者である熊野義孝著「高倉徳太郎における未定型教会論」(『日本キリスト教神学思想史』、『熊野義孝全集』第12巻、新教出版社、1982年)もご参照いただければと存じます。

「パクス・アメリカーナ」といかに向き合うか

拙稿「関東大震災後の『中学関東学院』におけるキリ

スト教教育—賀川豊彦・山室軍平・金森通倫 等をめぐって—」(『学院史資料室ニューズ・レター』第24号、2021年3月、29頁)でも触れましたように、1925(大正14)年、対外的には幣原喜重郎外相(敗戦後「日本国憲法」制定過程では首相)による国際協調外交「幣原外交」のもとで「ソ連」(ソヴィエト社会主義共和国連邦)との国交樹立が実現し、国内的には帝国議会で「治安維持法」と「普通選挙法」とが成立しました。

第一次世界大戦後と第二次世界大戦後との「二つの戦後」における「パクス・アメリカーナ」への日本の適応を繋ぐ役割を担った親英米派の中樞の一人として、幣原喜重郎が存在していました(三谷太一郎著「二つの戦後—パクス・アメリカーナと日本の『デモクラシー』—」、『人は時代といかに向き合うか』東京大学出版会、2014年、41-59頁参照)。因みに、20世紀以降「パクス・アメリカーナ」のもとで、「英語の青山」(青山学院)とか、「英語の関東」(関東学院)とか言われる場合の「英語」は、精確には「アメリカ英語」(米語)を指すものであろうかと存じます(同上、50頁参照)。

日本国憲法制定過程の研究で著名な古関彰一著『対米従属の構造』(みすず書房、2020年)の末尾「従属国家の向こうへ」では(石橋湛山と共に)内村鑑三にも言及された上で、「対米従属は、米国や日米安保との関係だけで見られがちであるが、実は日本近代のあり方そのものが根源から問われているといえよう」(同上、334頁)と述べられています。加藤陽子著「内村鑑三が見通していた戦争の本質とは」(『この国のかたちを見つめ直す』毎日新聞出版、2021年)もご参照いただければと存じます。

内村鑑三と坂田祐とを繋ぐ「キリスト信仰」(福音的キリスト教)

前掲の坂田祐著『新編 恩寵の生涯』編者でもある酒枝義旗(内村鑑三門下である藤井武の弟子にもあたる)は、「藤井先生」が次のように語ったと回想しています。《「人が救われるには善きわざが必要か、ただ主の十字架のみによるか」との問いをもって、ぶつつかる時…いつ、いかなる事情のもと、誰に向っても〔内村〕先生は「ただ十字架のみ」と答えられる。》(酒枝義旗著「内村先生と藤井先生」、前掲『現代に生きる内村鑑三』、97頁)と。

内村鑑三へ向けられた「藤井武の眼」の「熱と迫真のちから」そして「情愛の深さ」は、21世紀今日の日本でも着目されています(若松英輔著「内村鑑三 悲しみの使徒」岩波新書、2018年、241-245頁)。

また酒枝義旗は、「学院史」とも深く関わるバプテスト宣教師アキスリングについて、次のような着目されるべきかとも存じられる「個人的印象」を記していま

す。《アキスリング博士のお話は、私もバプテスト教会員だった関係で、入信の当時、たびたび拝聴しました。すばらしい日本語の説教でしたが、実のところ、これと言って感銘をうけた思い出はありません。今度の坂田先生の『恩寵の生涯』で、おそらくアキスリング博士の当時の説教が、内村先生にとって不満だった『倫理的福音』の糸をひいた内容だったからではないかと、思い当たります。…(一九六三年六月酒枝)》(前掲『新編 恩寵の生涯』復刻版[新装刊行]、329-330頁)と。

坂田祐については、大島良雄著「なぜ『いんまぬえる』なのか」(『いんまぬえる』第147号、学校法人関東学院、2022年5月、3頁)もご参照ください。

高倉徳太郎著『福音的基督教』(1927年)

かつて大正末期に、高倉徳太郎が「卒業礼拝式」(1926年3月)において説教した際、その司会を担当したのは、中学関東学院「教頭」を務めていた多田貞三でした。

当日の『坂田祐日記』(関東学院大学キリスト教と文化研究所 所蔵)には、《多田君司会 高谷[道男]君聖書、祈祷(…)高倉氏 善き選択ト題シテカアル説教ヲナセリ》と記されています。

『坂田祐日記』を読む一解説坂田創一(関東学院大学キリスト教と文化研究所 坂田祐研究会、2016年)には、当日の日記本文は引用されていませんが、坂田創一による「坂田祐日記主要事項抜萃」では、1926年3月7日(日)「卒業礼拝式 高倉徳太郎氏説教」(同上、55頁)とのみ記載されています。

『福音的基督教』刊行当時、C.B.テンネー関東学院学院長のもとで副院長であった千葉勇五郎(『関東学院百年史』、349頁)は、例えば次のようにも批評していました。《[高倉徳太郎]氏が浅薄なりとして一笑に付せらる、社会的福音の叫の如きも、偶然起つたものではない宗教の事が形式に流れ實生活を離れ、現代社会の實状と没交渉たらんとする弊害を痛感し、宗教を一層生活に徹底せしめんとするの熱誠より發露したものではないか。社会的なるが故に福音的ならずとは言はれまい。》(『福音的基督教』を読む、『基督教報』第874号、1927年12月2日、8頁)と。なお、関東学院大学図書館所蔵の高倉徳太郎著『福音的基督教』(長崎書店、1927年)初版本には、「多田先生寄贈」と記されています。

後に賀川豊彦は「社会的福音」の「大なる缺陷」を次のように指摘します。《私は福音的キリスト教と社会的福音とを區別しない。福音は個人を救ひ、亦社会を救ふのである。所謂社会的福音はハーナツク[ハルナツク]の感化を受けた人々に提唱されて居るので、贖罪の信仰を輕視し、又は無視して居る。》(賀川豊彦著「イエスの社会運動(上)―社会問題協議會に於ける講演一」、『基督教報』第916号、1929年9月27日、2頁)と。「賀川豊彦と社会的キリスト教」は、古屋英雄著『神の国とキリスト教』(教文館、2007年)もご参照を。

因みに1927(昭和2)年、「東京学院」と「中学関東学院」とが「合流」して、新たに出発した「関東学院」について、『基督教報』紙上には《関東学院の新組織は、遂

に文部省の認可を受けた。今や、同学院は、神學部、高等學部、中學部の三部より成る一大教育機關となつたのである。》(『関東学院の新組織なる』、『基督教報』第859号、1927年4月22日、1頁)と報告されていました。

中学関東学院の設立者で、その校長(院長)としての坂田祐を招聘した、バプテスト宣教師C.B.テンネーが「学院長」「副院長」は千葉勇五郎)となった「関東学院の新組織」のもとで、坂田祐は「高等學部長」と「中學部長」とを兼任します(『関東学院百年史』、349頁)。

「学院史」において最も重要な位置を占め得るとも存じられる「坂田祐」ではありますが、「慶応義塾の福沢諭吉」や「同志社の新島襄」等とは立場が根本的に異なるという事実は、やはり精確に再確認しておきたく存じます(拙稿「日米関係史のなかの『中学関東学院』―関東大震災後の一側面―」、『学院史資料室ニュース・レター』第23号、2020年3月、22頁)。

なお、中学関東学院としては最後の「卒業礼拝式」となる、1927年2月27日(日)午後における説教者は、やはり「バプテストでない」山室軍平でした(「卒業式御案内」、『基督教報』第855号、1927年2月25日、3頁)。

「中學關東學院長 坂田祐」による「卒業式御案内」において「來ル三月五日(土)午前十時本學院第四回卒業式舉行致候間御臨席ノ榮ヲ賜ハリ度此段御案内申上候…尚來ル二月二十七日(日)午後二時卒業禮拜式舉行救世軍少將山室軍平氏ノ説教有之候間御來會被下度候」(同上、3頁)と記されていました。

前掲『坂田祐日記』当日の箇所には《山室救世軍少將説教、(…)十字架ノ三ノ意義ヲ話シ奨励ヲ力強く与ヘタリ》と記されています。その当時は、山室軍平が「日本人として初めての救世軍司令官に就任し、長年にわたる日本救世軍にとっての悲願が実現」(室田保夫著『山室軍平』ミネルヴァ書房、2020年、191頁)していた時代でした。

桑田秀延も、「明治以来キリスト教界が輩出した多くの人物の中で、教会人としての植村正久、無教会の内村鑑三、救世軍の山室軍平」の三人を「はなはだ傑出した人物である」(桑田秀延著「内村鑑三の日記と手紙」、前掲『現代に生きる内村鑑三』、144頁)と考えていました。

因みに(かつて「関東学院百年史編集主任」も務めた)片子沢千代松著『日本のプロテスタント―120年の歩み―』(YMCA出版、1979年)において「桑田は、教義学を専攻、欧米の神学体系を移入し日本キリスト教に学問的基盤をあたえた人といわれる。『弁証法的神学』(一九三三年)『基督教神学概論』(一九四一年)の著がある」(同上、157-158頁)と紹介されています。なお、関東学院大学図書館所蔵の同書初版本には、「謹呈 多田貞三様 著者 片子沢千代松」と筆記されています。

また、同じく関東学院大学図書館所蔵の桑田秀延著『基督教神学概論』(長崎書店、1941年)初版本には、「謹呈 村田学兄 昭和十六年六月廿一、桑田秀延」と筆記されています(「村田学兄」は、第二次世界大戦後「関東学院大学神学部教授」にもなる村田四郎のことです)。

〔本稿の続き(三)は、次号へ掲載〕

◆寄贈資料の紹介◆



1967(昭和42)年1月

坂田創先生と中学旧本館(2016(平成28)年解体)

坂田創先生の遺品をご寄贈いただきました。その一部をご紹介します。
坂田創先生のお写真は笑顔であふれ、その優しいお人柄が表れています。

坂田創(さかたはじめ)…1926(大正15)年 佐々木金吾、せつの長男として出生。1944(昭和19)年にバプテスマを受けられた。1947(昭和22)年に坂田祐先生の養子となり、中学校高等学校の理科の教員、橄欖会会長等に就き、2014(平成26)年に召天されるまでその人生の大半を関東学院のために働き、キリストに従い生きてこられた。

参考:『関東学院学院史資料室ニュース・レター』No.18,p.15

1904(明治37)年 坂田祐先生

東京学院高等科1年入学の頃 日露戦争召集のしばらく前
(日露戦争従軍 同年6月12日)



1939(昭和14)年
坂田祐先生(右)、
坂田創先生(中央)、
愛犬ポチと



前列左 坂田祐先生



左 坂田祐先生



1942(昭和17)年6月
プラネタリウム(天象儀)見学記念
(東日天文館にて公民科見学)



1905(明治38)年
日露戦争 黒溝台会戦
後列右 坂田祐先生

東日天文館…1938(昭和13)年に有楽町に開館した日本で二番目、東京で初のプラネタリウム。戦時中も運営を続けていたが、1945(昭和20)年の東京大空襲により被災し再建不可能となった。

◆学院史資料・情報提供のお願い

卒業生、修了生、元教職員の皆さまに学院に関係する資料・情報の寄贈をお願いしております。

お手元にあります学生時代のお写真や学院のパンフレット、式典、学祭の配布物など、大切な記録かと思いますが、学院史資料の収集にご協力いただけますよう、お願いいたします。資料のご提供については以下にご連絡ください。

Tel:045-786-7066, E-mail:archives@kanto-gakuin.ac.jp 学院史資料室事務室

編集後記

取り上げるべきテーマが多い中、今号は小学校の創立70周年と大学の金沢文庫キャンパスについてを特集といたしました。貴重なお話や思いを本誌にご寄稿いただくことで、学院史として積み重なり、歴史の空白が徐々に埋まっていくと考えています。

また、この数年間は大学の修学地としてのキャンパスの変化が早いので、しっかりと記録していかなければならないと思いました。金沢文庫キャンパスの他、関内メディアセンター、横浜・関内キャンパス、小田原キャンパスが該当します。それぞれを正確に記録していきながら、関わってきた方々のお話や思いを今後も掲載していきたいと考えています。

◆学院史資料等、ご返却のお願い

以前に当資料室や坂田記念館から研究等のご利用目的で貸し出した資料のうち、未だご返却いただけていないものが多数ございます。

もしもお手元にありますらご返却をお願いいたします。

学院史資料室事務室 室長 田中宏治

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第26号

発行日 2023(令和5)年3月1日

発行人 関東学院 学院長 松田 和憲
編集 関東学院 学院史資料室事務室
〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL.045-786-7066 FAX.045-786-2932



こちら(学校法人関東学院 HP)から
本誌のバックナンバーが閲覧できます。